千四百年の歴史

堂島

dojima

堂島のなりたち
近代化する街
北新地
戦後の発展
堂島の「今」と「これから」

堂島地域誌発行にあたって

堂島連合地域誌発行にあたり一言ご挨拶申し上げます。

大阪市地域振興会は、昭和50年に結成され「誰もが住みやすい自らの町は自らの手でつくる」を合い言葉に、たゆみないボランティア活動を続けて頂いております。長きに亘り諸先輩方々をはじめ、皆様方のあたたかいご支援を賜り、本日に至っておりますことを厚く御礼申し上げます。

また、大阪市赤十字奉仕団は昭和24年10月に結成され、日本社資募金への毎年の協力をはじめ、災害義援金募集などへの取組み、災害救助災害訓練等に活動頂き、役割を果たして頂いております。堂島連合振興町会 堂島連合赤十字奉仕団は、地域会員役員を同じくする一体の組織であります。

近年は街頭犯罪の多発化、また予想もしない自然大災害が起こると予測されています。このような状況にも迅速に対応できるよう、より一層の結束を固め自助共助及び公助のつながりが重要です。

堂島連合振興町会では、スローガンとして掲げている「安全安心で美しい町づくり」の一環としまして、多数の街頭防犯カメラ、自動体外式除細動器(AED)、非常災害時などに速やかに避難して頂くためのスピーカーを設置しております。

歴史ある堂島は大阪北の玄関口でもあります。この地が、安全安心で美しい町であり続けるため、また未来に向かってより大きく築き上げていくためにも、今後皆様の更なるご支援ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

本誌の発行にあたりまして、ご協力を賜りました関係者の皆様に衷心より厚く御礼申し上げ、私の言葉とさせて頂きます。

堂島連合振興町会長
堂島連合赤十字奉仕団長
山本弘澄

「堂島 千四百年の歴史」
2016年3月10日発行
編集・発行／堂島連合振興町会
企画・制作／株式会社ダン計画研究所　株式会社140B
デザイン／田中直美
地図／齋藤直己
※本事業は大阪市地域活性化事業基金(ポートピア梅田環境整備協力費)により実施しています。

堂内には本尊である薬師瑠璃光如来、地蔵菩薩像、弘法大師像など仏像4体、涅槃図など軸2本が祀られる。瑠璃光如来の「瑠璃」はガラスの意味を持ち、外観はそれにあやかった。

I 堂島のなりたち

「堂島」の誕生と薬師堂。

堂島の地名の由来は諸説あるが、その一つはお堂のあった島であることとされる。そのお堂こそ、現在も堂島アバンザの一画に建つ堂島薬師堂であるという。

推古朝（593〜628年）の史料に「東は玉造に四天王寺をつくり、西の方洲の中に御堂を建立した」という記録がある。また、延宝3年（1675）の古文書『芦分船』にも、聖徳太子が四天王寺を創建する際の資材を載せた船が暴風雨で難破し、漂着した洲の中にお堂を建てた旨の記述がある。

これらが堂島薬師堂のことであれば、堂島のルーツは1400年以上もさかのぼれることになる。

以後、薬師堂への信仰は連綿と続いていくことになる。明治42年（1909）の北の大火で堂宇を焼失するも、「花半」という店の主人が仏像を持ち出して自宅に運び、類焼を逃れたという。また、明治44年に（1911）に「堂島座」という劇場ができた関係で、大正2年（1913）に東に移されると、堂島座の関係者が次々に亡くなり、祟りではないかと言われたらしい。長い歴史を経て、この時代にはすっかり地元の人々の崇敬を集めていたと言えるだろう。

戦災を逃れた薬師堂は、昭和28年（1953）に奈良の薬師寺の管長を招き、盛大な復興祭を営んだ。これを機に、中断していた節分や盆踊りの行事も復活する。昭和50年（1975）、毎日新聞社の新社屋計画に伴って仮移転。以後、毎日新聞社が主体となり、月2回の法要が行われることになった。

そして平成11年（1999）、堂島アバンザの建設に際して、現在の場所に戻される。新しいお堂は三角形のミラーガラス127枚を組み合わせたとてもモダンなデザインで、周囲の現代的なビルとの調和を図っている。

昭和28年の復興祭の法要。
写真提供／毎日新聞社

左／昭和36年（1961）の節分祭の豆まき行列。
右／昭和30年代の堂島薬師堂の盆踊りの様子。
写真提供／毎日新聞社

現在の堂島薬師堂が最も華やぐのは、何と言っても2月3日の「節分お水汲み祭り」だ。もともと曽根崎新地で行われていた節分祭と、地元や大阪の活性化を目指して始まったお水汲み祭りが合わさったもので、2004年から行われている。

薬師寺の僧侶による法要のあと、薬師寺金堂の井戸から汲み出した「お香水」と大阪天満宮の水を参拝者の竹筒に注ぎ、無病息災や商売繁盛を祈る。そして鬼たちが北新地を練り歩くと、福男が豆をまいて厄払いをする。最後は薬師堂に祀られている弁財天の化身である龍が舞い、夜の北新地を盛り上げる。堂島連合振興町会や地元企業、そして堂島に住む人や働く人が一緒になったお祭りは、今やすっかり大阪の冬の風物詩になった。

すぐ東側に、昔の薬師堂の建物が残っている。現在は飲食店として使われている。

2016年2月3日の節分お水汲み祭りの様子。

わたしの堂島物語 ①

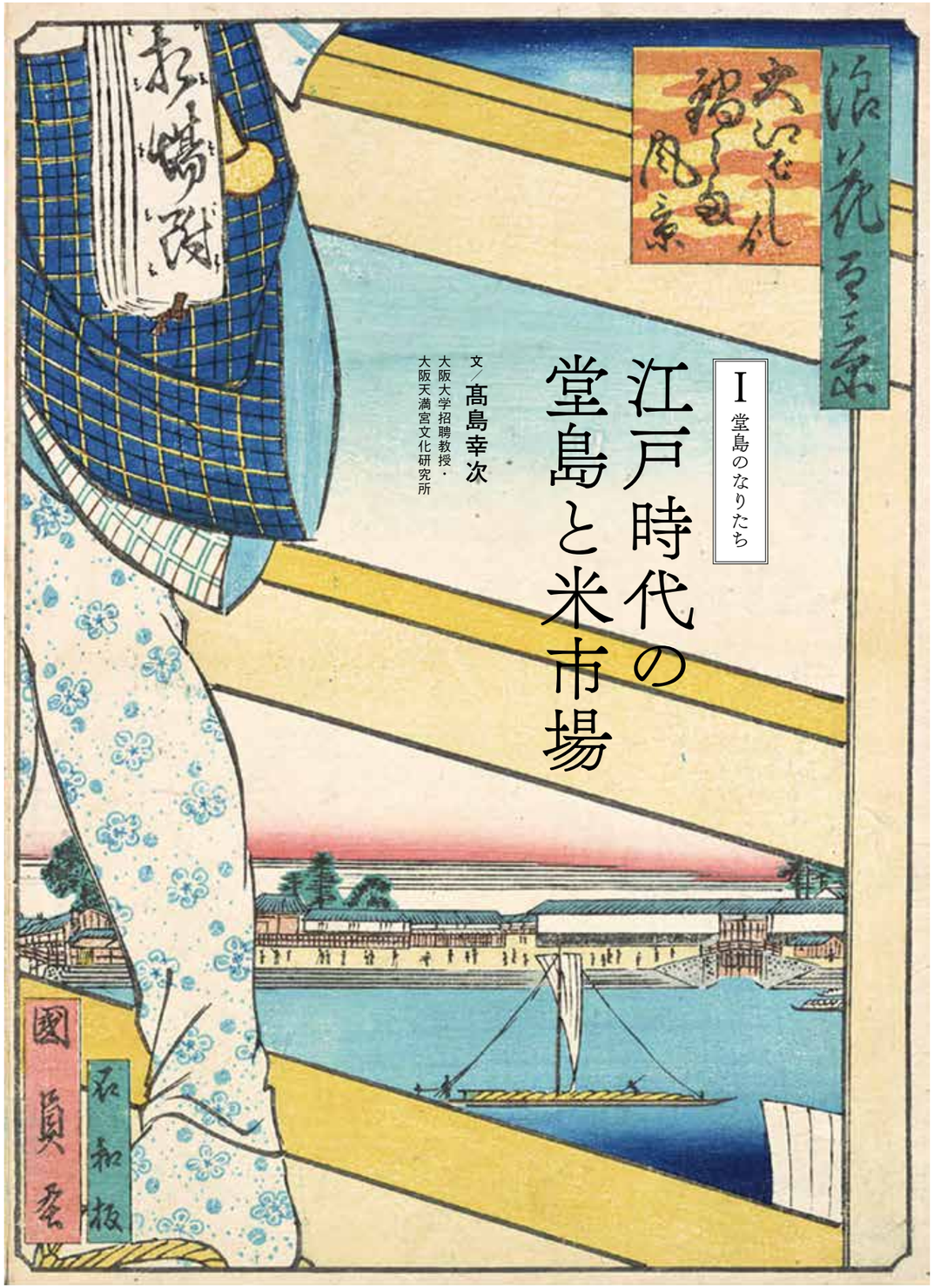
「お水汲み」の始まりが、地域を一つにした。

「北新地が元気がなくなったら、大阪は沈んでしまう」。当時のサントリーの副社長の鳥井信吾さんに声をかけていただき、地元企業と北新地社交料飲協会、そして私たち町会が一緒になって新しいイベントを始めることになりました。町会ではずっと節分祭をやっていたので、一緒にやることになりました。実はそれまで料飲協会と地元町会の関わりはあまりなかったのですが、私自身も北新地に元気がないと感じていましたから、全員が一緒にやるというのはいいことだと思いましたね。

初めは顔も知らない人同士でしたが、北新地の店の方々、地元企業に勤める社員の方、そして私たち町会のメンバーと、堂島のいろいろな立場の人たちが集まる接点になりました。ご信仰の深い方からのご寄付に助けられ、今年で12年目を迎えました。規模も大きくなり、地元の役員だけでは絶対にできません。これからも周囲の人といい関係を築きながら、この行事が続いていくことを祈っています。

山田金三さん
株式会社京松 代表取締役

薬師如来は病苦から衆生を救うとされるが、繁華街にある堂島薬師堂には商売繁盛を祈願する人も多い。



Ⅰ 堂島のなりたち

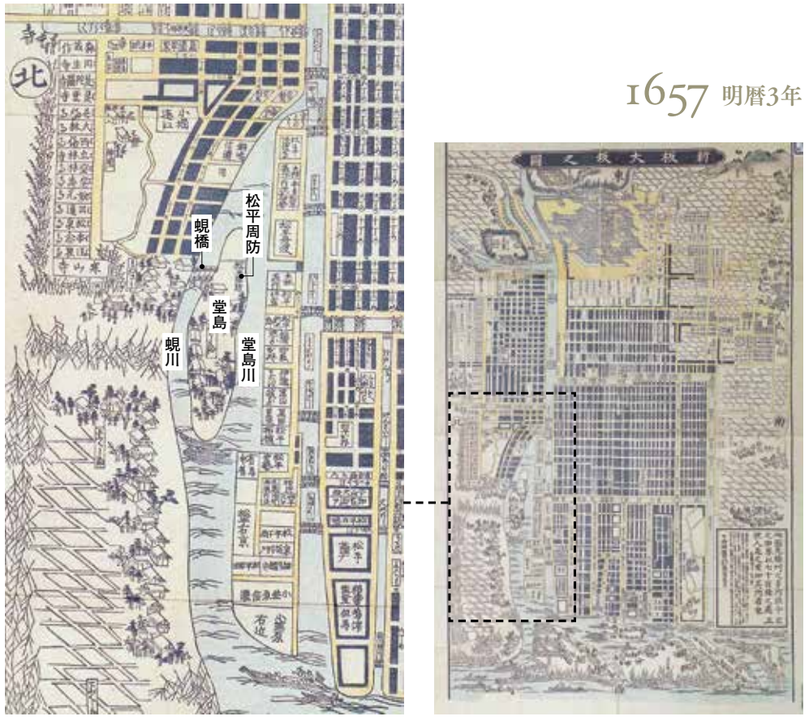
江戸時代の堂島と米市場

文／高島幸次
大阪大学招聘教授・
大阪天満宮文化研究所

『浪花百景』より歌川国員「大江ばしより鍋しま風景」（大阪府立中之島図書館蔵）

1657 明暦3年

あの日の堂島に渡る。



『新板大坂之図』〈図1〉
（大阪府立中之島図書館蔵）

堂島は〈島〉だった。

「堂島はかつて島だった」と言ってもピンとこない人がいる。「地名に〈島〉が付いているでしょう?」と重ねても反応は鈍い。大阪には加島・御幣島・福島・姫島・出来島などの〈島〉地名がやたらに多いのだが、そのほとんどは古くに陸地化したので〈島〉のイメージを引きずっていないのだ。

だがしかし、他の地名とは異なって、堂島は〈島〉でなくなってからまだ100年も経っていない。以下、堂島が〈島〉だった時代にタイムトリップしてみよう。

堂島の成立と蜆川。

堂島の〈島〉としての成立時期は詳らかではないが、その名は寛正2年（1461）の『中島崇禅寺領目録』に「堂島畠」と見えている。同『目録』には「そねざき平田」もあるから、堂島・曽根崎あたりは、同寺領の田畑として開発されたことがわかる。ちなみに、対岸の中之島の史料上の初見は慶長19年（1614）の大坂冬の陣関連の史料だから、堂島の初見はそれより150年も古いことになる。

「堂島」の名の由来については諸説ある。

①四天王寺の建立資材が漂着した、あるいは資材置場があったことから同寺の御堂にちなむ。
②蜆川と堂島川に挟まれた「胴島」、あるいは川（＝皮）に挟まれた鼓の意味から「筒島」となった。
③風流人の小川宗吾が設けた「五花堂」の名にちなむ。

などなどである。現在、堂島アバンザにある「堂島薬師堂」が推古天皇時代の創建だという伝承は、①の説にリンクさせている（P2）。

江戸時代前期の明暦3年（1657）の『新板大坂之図』〈図1〉を見ると、堂島川と蜆川の間に「たうしま（堂島）」が描かれている。蜆川は、現在の大江橋北詰東（現関西電力曽根崎変電所あたり）で堂島川から分かれて西へ弧を描くように流れたあと、堂島の西端（現堂島大橋北詰の西側）で再び堂島川に合流している。

堂島の新地と蔵屋敷。

蜆川の名については、一般には「蜆が採れる川」だと思われがちだが、江戸時代の地誌『摂津名所図会』（1796〜98年成立）は、もともとは広かった川幅が、江戸初期の改修で狭まった（縮まった）からだと説明している。「縮まった川→縮み川→しじみ川」というわけだ。

『摂津名所図会大成』（1855年成立か）も、「貞享年間より以前はこの川幅広く、もとより深くして大船の入りし所」と説明する。かつて大船が出入りできたというのは驚きだ。

ここに貞享年間とあるのは、貞享〜元禄期（1684〜1704）の河村瑞賢による改修工事で川幅が狭められたことを指す。瑞賢は、東北諸藩の年貢米を江戸へ輸送する東廻り航路・西廻り航路を開発したことで有名だが、河川の治水にも長けていた。幕府から淀川河口の治水工事を任された瑞賢は、安治川の開削とともに、蜆川の改修も手がけたのである。

蜆川改修の結果、元禄元年（1688）にはその左岸（南側）を中心に堂島新地が成立した。堂島新地は、〈島〉内の開発地だけではなく、安治川沿いの諸町と中之島港橋町を加えた20ヶ町の総称だが、幕府はここに茶屋125株、煮売屋50株、風呂屋1株、湯屋3株と芝居2箇所の営業を認可した。

株とは専売営業権の単位で、認可制により茶屋などの乱立を制限したのである。「茶屋」は、現在の喫茶店的な「水茶屋」ではなく、「茶立女」を名目とする遊女を抱えた「色茶屋」のことだ。「風呂屋」にも「髪結女」の名目で遊女がいた。「煮売屋」は飲食店、「湯屋」は現在の銭湯にあたる。

この堂島新地の認可から20年後の宝永5年（1708）には、堂島の蜆川対岸に曽根崎新地が成立し、茶屋98株、煮売屋56株、風呂屋4株、湯屋1株、旅籠屋5株と、芝居2箇所・小芝居1箇所が認可された。

こうして蜆川の両岸には、茶屋や煮売屋などが建ち並び、船場の商人や蔵屋敷の武士で賑わう遊興地に発展した。川面には、茶屋への通い船や遊山用の屋形船が浮かび、それを目当てに物売船や芸人船も行き交った。「大坂しゞみ川船遊び」〈図2〉に描かれた遊山船は、いままさに蜆川から大川に漕ぎ出ようとしている。

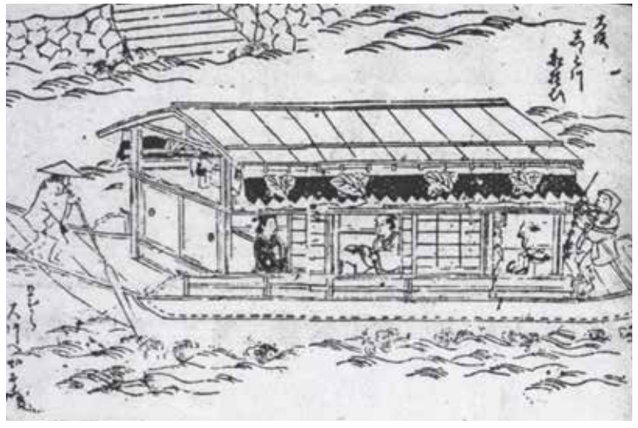
ちなみに、元禄16年（1703）初演の近松門左衛門『曽根崎心中』は、堂島新地の天満屋の遊女・お初と内本町平野屋の手代・徳兵衛の心中物だ。露天神社の森で情死したことから、同社はのちに「お初天神」と呼ばれるようになり、今も境内のお初・徳兵衛のブロンズ像に当時を偲ぶカップルが訪れる。

さて、先の『新板大坂之図』では、堂島に人家は描かれているが町割りは見えず、島の東端には「松平周防」と見える。

明暦3年の松平周防といえば浜田藩（島根県）の藩主・松平周防守康映のことだから、堂島に浜田藩蔵屋敷があったことになる（のち中之島に移転）。

その30年後の元禄元年（1688）『辰歳増補大坂図』〈図3〉では、堂島に「船大工町」と「太郎兵衛町」の町割りができ、「松平周防」の他に「安藤対馬」の名も見える。当時の安藤対馬とは高崎藩（群馬県）の藩主・安藤重博のことだから、この頃には高崎藩の蔵屋敷もあったようだ。

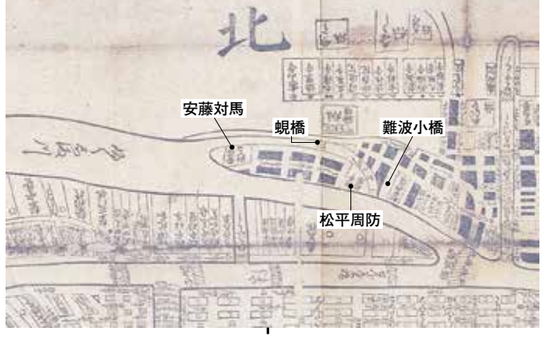
元禄16年（1703）になると、堂島・中之島の内外に91藩の蔵屋敷を数えるというが、そのうち鹿島藩（佐賀県）、大村藩（長崎県）、唐津藩（佐賀県）、松山藩（岡山県）、福山藩（広島県）、人吉藩（熊本県）、臼杵藩（大分県）の7藩が堂島に蔵屋敷を置いていた。堂島は新地における遊興と、蔵屋敷の建ち並ぶ経済の〈島〉だったのだ。

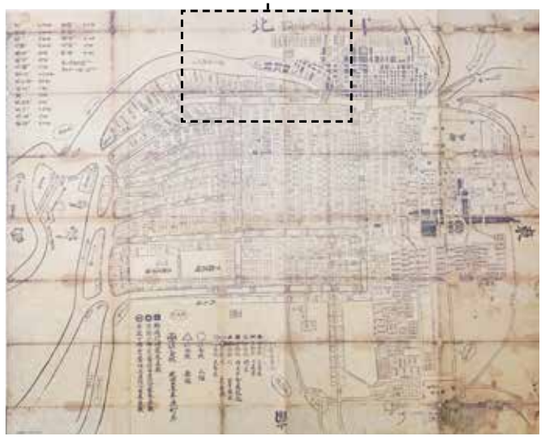


〈図2〉

大坂しゞみ川船遊び

蜆川をゆく遊山船。『大坂年中行事絵本』より





〈図3〉

『辰歳増補大坂図』

（大阪府立中之島図書館蔵）

1688 元禄元年

堂島・中之島への架橋。

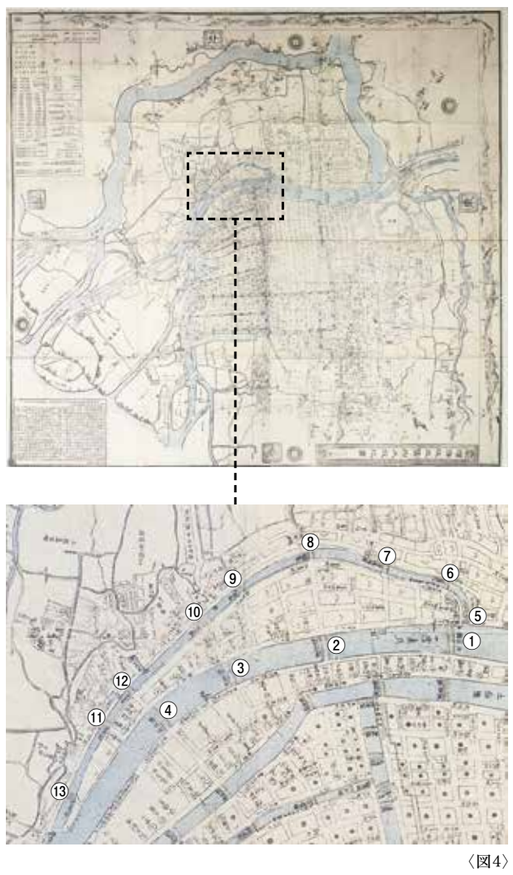
次に堂島・中之島への架橋の様子を時系列に見ておこう。

明暦3年『新板大坂之図』は、土佐堀川に栴檀木橋、淀屋橋、肥後殿橋（のち肥後橋）、筑前橋、田辺橋（のち常安橋）、越中橋の6橋を描く（当時の中之島の東端は現在の中央公会堂付近なので、難波橋・天神橋は数えていない）。橋名の「肥後」「筑前」「越中」は橋近くの蔵屋敷に、「淀屋」「田辺」「常安」は商人の名にちなみ、中之島の蔵屋敷と船場の商人の強いつながりを示している。

ところが、同図の蜆川を見ると、対岸の曽根崎村と結ぶ蜆橋[6]（堂島橋）が1本架っているだけだ。その後の『辰歳増補大坂図』を見ても、堂島川からの分流地に難波小橋[5]が1本増えただけ。そして、堂島川にはまだ1本の架橋もないのだ。

しかし、元禄14年（1701）頃の『大坂三郷町絵図』では、堂島川に大江橋[1]、渡辺橋[2]、田蓑橋[3]、堀江橋（のち玉江橋）[4]が架かり、堂島と結んでいる。堂島の下流に架けられた船津橋とともに、堂島新地の開発に伴なって一気に架橋されたもので、「元禄五橋」と総称する。その橋上には、堂島新地や後述する堂島米市場へ通う船場の商人や中之島蔵屋敷の武士の姿が絶えなかった違いない。

また蜆川にも、それまでの2本に加えて曽根崎橋[7]、桜橋[8]、緑橋[9]、梅田橋[10]、汐津橋[11]が架けられている。のちの文化3年（1806）の『増脩改正摂州大阪地図』〈図4〉では、さらに浄正橋[12]、堂島小橋[13]が増えている（その後、桜橋と緑橋の間に助成橋が架橋される）。こうして、堂島は9本もの橋で北対岸と、4本の橋で中之島と結ばれたのである。



〈図4〉

1806 文化3年

『増脩改正摂州大阪地図』

（大阪府立中之島図書館蔵）

『浪花名所図会』より安藤広重「堂島米市の図」（大阪府立中之島図書館蔵）

ちなみに、享保5年（1720）初演の近松門左衛門『心中天網島』は、曽根崎新地の紀伊国屋の遊女・小春と天満の紙屋治兵衛の心中物だが、曽根崎新地から大長寺（都島区網島町）への道行を語る「名残の橋尽くし」には、蜆川の梅田橋・緑橋・桜橋・蜆橋が読み込まれている。

堂島米市場の成立と変遷。

江戸前期の豪商・淀屋が私費で淀屋橋を架けたことはよく知られている。その淀屋の2代目・言当（不庵）の頃、淀屋橋南詰の店頭に米市が立ち、往来の妨げになるほどにぎわったという。しかし、元禄10年（1697）には堂島新地振興策の一環として、米市は対岸の堂島に移された。その結果、堂島新地の茶屋や煮売屋の多くは曽根崎新地に移転し、堂島は商業地域としての色彩を濃くし、曽根崎新地は遊所の中心地として発展することになる。

この米市では、現物取引（正米取引）だけではなく、先物取引（帳合米取引）も行われたが、幕府は先物取引を不当な商行為としてたびたび禁止している。しかし、享保15年（1730）には幕府が帳合米取引公認したことにより堂島帳合米市場が成立した。図5

その午前には先物取引（空売と空買を帳付けするだけの売買）が、午後には現物取引（蔵屋敷が発行する「米手形」の売買）が行われた。米仲買商は、米10石単位の「米手形」を入札で購入し、それを不特定多数の顧客商人に売るのである。買った商人は米が必要なら期限内に米に交換し、投機目的なら相場の推移を見守ることになる。

江戸中期の大坂には全国の諸藩から毎年100万石を超える年貢米が運ばれ、ここで決まった米相場は旗振り通信や飛脚によって全国に伝えられた。今も各地に旗振り通信の中継点の由来が伝わっている。堂島は文字通り「諸国相場の元方」だったのである。

その後、明治維新に伴って、明治2年（1869）に米市場は一旦廃止されたが、翌々年には堂島米会所として復活している。その後、紆余曲折を経て明治26年（1893）に大阪堂島米穀取引所へと発展したのち、昭和14年（1939）米穀配給統制法の施行によって廃止されるまで続いた。現在、その跡地には堂島米市場跡記念碑が建っている。

ち並び、その北側を新地本通、南側を堂島上通が走っている。

こうして〈島〉ではなくなった堂島は、大阪駅周辺に連なるシビックセンターとして発展し続けることになる。

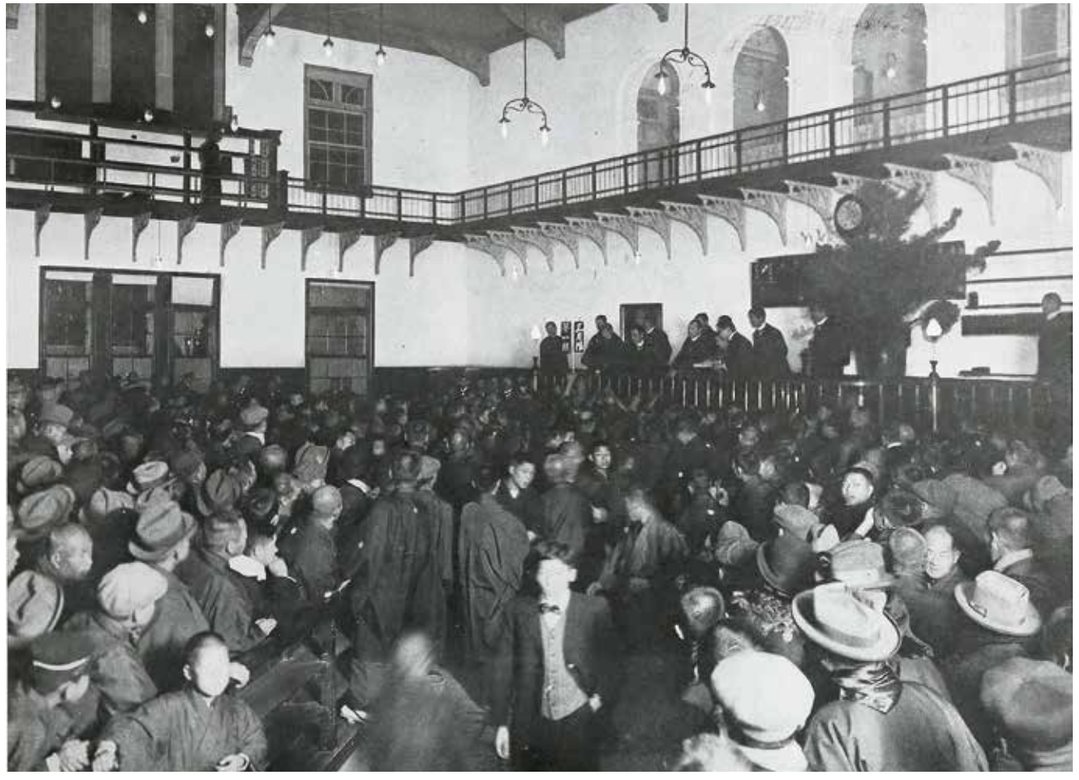
たかしま・こうじ
1949年大阪市生まれ。大阪大学招聘教授。専門は日本近世史。大阪天満宮文化研究所員も務め、天神祭研究の第一人者。また天神祭のボランティアガイド役である天満天神御伽衆を養成するなど、普及・伝承にも尽力する。多くの講演や古文書講座をこなすほか、天満天神繁昌亭で毎月25日に行われる「天神寄席」はじめ、落語会やイベントのプロデュースも多数。

〈島〉ではなくなった堂島。

維新の後も堂島新地は存続したが、明治42年（1909）の「北の大火（天満焼け）」によって堂島も曽根崎も全焼した。この火災で生じた膨大な瓦礫が蜆川に投げ込まれ、緑橋から上流部（東部）は埋まり、大正13年（1924）には残っていた下流部も埋め立てられて、蜆川は消滅した。

火災の後、堂島新地も曽根崎新地も復興し、大阪堂島米穀取引所も再興された。蜆川がなくなったため両新地は「北新地」に一体化され、かつての流路には、数えきれない店舗が入居するビル群が建

堂島川沿いに建つ米市場跡の記念碑。



『大阪府写真帖』より「大阪堂島米穀取引所」（大阪市立中央図書館蔵）

明治時代の堂島の様子。

【明治44年（1911）地籍図】

明治維新後の版籍奉還によって、諸大名の領地は天皇および明治新政府に返還されることになった。江戸時代に蔵屋敷が並んでいた堂島の西部には倉庫・官地・工場など公的な性格を帯びた建物が建てられ、特に産業振興を目的とした用地として使用された。一方、東部は比較的小さい宅地が並び、区割の変化のスピードはそれほど速くなく、明治44年（1911）の地図でもそれが見て取れる。

明治7（1874）年、大阪～神戸駅間の鉄道が開業。現在の大阪駅より南西の位置に大阪駅が置かれた（西成郡曽根崎村）。当初は人よりも貨物輸送の比重が大きく、大阪駅に着いた荷物を船で運ぶため、明治10～11年頃、堂島川から駅の南西までつながる堀割が開削された。

風景を一変させたのは明治42年（1909）の北の大火である。堂島はほぼ全域が焼失し、この時に出た瓦礫によって、明治45年（1912）に堂島掘割川以東の曽根崎川（蜆川）が、大正13年（1924）に掘割川以西の曽根崎川が埋め立てられた。

しかし、土地所有者および区割りはそれほど変わらず、土地の造成や大火などの影響にもかかわらず、それぞれのエリアの特性は江戸時代から継承されている。

キタの大火後の堂島の様子。
一面、焼け野原となった。
（大阪市立中央図書館蔵）

明治5年（1872）には堂島中町に「渋谷ビール製造所」が設けられたが、収支が償わず10年ほどで休止した。国産ビールの発祥とされ、石碑が建てられている。

※点線のエリアは明治42年の大火で被害が大きく、明治44年の地籍図が白紙だったため、大正15年（1926）地図上に明治33年（1900）の地図を復元した。

〈凡例〉
- 宅地
- 企業
- 官地

① 曽根崎新地の歴史が色濃く残る社交エリアの核。

（曽根崎新地1・2・3丁目、曽根崎永楽町、曽根崎上3・4丁目）

桜橋北詰に福井座があったが、明治42年の北の大火で焼失してしまった。また、曽根崎新地1丁目、2丁目は特に細かく区割された民有地が並んでおり、お茶屋が軒を連ねる江戸時代からの風景をそのまま残していたことがうかがえる。

明治10年（1877）に明治天皇が朝陽館製藍所へ行幸。後に石碑が建てられ、NTTテレパーク堂島第3ビル（NTT西日本大阪支店）南側の壁面沿いに今も残っている。

④ 蔵屋敷跡地に倉庫・官地・工場が立地。

（堂島濱通2丁目、上福島1丁目）

五代友厚が朝陽館製藍所（藍染用の染料を製造する）を設立。また、大阪の商業が衰退していくのを憂い、朝陽館製藍所内に大阪商法会議所が設けられた（後の大阪商工会議所）。明治23年（1890）、外国人を通じた貿易ではなく直接貿易ができるよう商品知識や世界事情に通じることを目的に、大阪府立商品陳列所が設立される。工業試験所も併置していたが、北の大火で焼失し、知事会館となった。その後、大阪府立商品陳列所は東区本町橋東詰の府立大阪博物場跡地（現マイドーム大阪）に移転し、大正7年（1918）大阪工業試験所となった。

③ 米市場を中心とした、商売街区としての性格を継承。

（堂島浜通1・2丁目）

享保10年（1725）、米仲買と両替屋の株が許されたことで商売の街区となった。堂島浜通1丁目には大阪堂島米穀取引所、2丁目には紡績株式会社（明治15年創業・現東洋紡）、北浜銀行があり、江戸時代からの地区の性格を継承していると言える。

② 江戸時代以来の社交のエリアに財閥藤田組の影響。

（堂島船大工町、堂島裏1・2・3丁目、堂島中1・2丁目、堂島北町）

堂島中2丁目に藤田伝三郎によって創設された藤田財閥（後の藤田組）の本拠地。明治43年（1910）大阪初の綿会社、内外綿株式会社が堂島北町に移転。内外綿株式会社は堂島北町を本拠に支那綿直輸入、紡織工場を上海におこすなど発展した。翌年には、堂島裏2丁目に堂島座（地図では「堂島演藝株式会社」）が建つ。それに伴い、この場所にあった堂島薬師堂が東方に移転した。江戸時代からの社交・芸能の性格を受け継ぎながらも、藤田組の影響で産業に従事する企業も増えつつある。

II 近代化する街

Ⅱ 近代化する街

毎日新聞社が堂島に。メディアタウンへの変貌。

昭和8年（1933）10月、大阪駅上空からの風景。ほぼ中央に大阪毎日新聞本社。堂島川を隔てた中之島には大阪朝日ビル（改築中）や、画面左上には日本銀行大阪支店（現存）、大阪市役所旧庁舎。その北、御堂筋沿いには堂島ビル（現存）が見える。

毎日新聞大阪本社が堂島で稼働を始めたのは大正11年（1922）4月のこと。明治9年（1876）に誕生した『大阪日報』がその後『大阪毎日新聞』と紙名を変え、明治22年（1889）に東区大川町（現在の三井住友銀行大阪本店）に本格的な社屋を構える。しかし日露戦争や第一次世界大戦を契機に部数もページ数も増え、敷地を拡張してもなお手狭となった。また大阪駅に新聞を運ぶ際に淀屋橋と大江橋の2つを渡る（大阪朝日は渡辺橋のみ）という手間は、編集の締切時間にまで影響したのである。

「広い敷地」「大阪駅に近い」候補地を探していると、松竹合名会社所有の「堂島座」が経営不振で解散し、その土地を買収できることとなる。まだ周囲は低層の建物のみだった堂島に、花崗岩の外壁で覆われた「白亜の殿堂」本社社屋が出現した。

堂島に新拠点を置いた大阪毎日はこの大正11年から新事業を次々とスタート。日刊紙に加え『英文大阪毎日』や『点字大阪毎日』を発行し、週刊誌の『サンデー毎日』も創刊。さらにその翌年には春のセンバツ（当時は選抜中等学校野球大会）の主催も開始した。

全国紙が本社を構えたことで、大大阪時代には堂島・中之島エリアへの集積が強まる。その現れが堂島ビル（P16・現存）や後に阪大病院となる大阪医科大学付属病院（1924年）、ダイビル（1925年・現ダイビル本館）、中央電気倶楽部（1930年・現存）などである。その社交場として高級歓楽街である北新地は大いににぎわった。

しかし太平洋戦争が勃発すると堂島もたびたび空襲の標的となり、昭和20年（1945）の夏には完全に焼け野原となっていた。それでも奇跡的に空襲を免れた毎日新聞社は戦後、いち早く新聞発行が可能な体制を構築した。スポーツ大会の主催も精力的に行い、毎日マラソンは昭和21年に、全国高校駅伝も昭和25年にスタートし、今日に至る。

大阪大空襲の結果、堂島もほぼ完全に焼け野原状態になるが、毎日新聞大阪本社は焼け残り、戦前・戦中の数多くの貴重な資料も焼失を免れた（1945年6月撮影）。

昭和も50年代に入ると、速報性という点では新聞はその座をテレビに完全に譲っていた。毎日新聞は経営が悪化し、本社の老朽化も深刻だったため土地ごと手放し、売却益で移転と新社屋を建設する決断を強いられていた。

昭和62年（1987）、毎日新聞大阪本社は新社屋を西梅田のオオサカ・ガーデン・シティに建設することを決定し、2年後に起工。平成4年（1992）12月14日には西梅田で本社機能が稼働をはじめる。

毎日新聞大阪本社跡は2000年に地上23階地下2階建ての商業施設と事務所の「堂島アバンザ」として再デビュー。ジュンク堂書店大阪本店や、毎日会館当時から人気の洋食店「鶴のす」などがテナントとして入り、現在も営業を続けている。

四つ橋筋に面した大阪毎日本社の壁は、道行く人のメディアだった。その日の紙面を全ページ掲出するだけでなく、総選挙の際には臨時開票速報掲示板も登場（1937年5月撮影）。

びわ湖の毎日マラソンや都大路を走る高校駅伝は戦後の一時期、堂島の大阪本社発着だった。この時のマラソンは高石町（現高石市）折り返し（1956年5月撮影）。

昭和31年（1956）から堂島は大きく変貌する。この年、毎日新聞社南隣に毎日会館（北館）が完成し、11階に毎日文化ホールが誕生する。名画の上映やコンサート、ラジオの公開録音が行われた。

同年12月には関西初の民放テレビ局である大阪テレビ（ＯＴＶ＝毎日新聞・新日本放送・朝日新聞・朝日放送が共同出資）が現在のＡＮＡクラウンプラザホテルの場所に誕生。ＯＴＶは昭和34年（1959）の6月に朝日放送と合併した。また前年に新日本放送から改称した毎日放送（ＭＢＳ）がテレビ放送をスタートさせた。千里にスタジオが移る（1960年）までは堂島に新聞社・テレビ局・ラジオ局が並立していた。

昭和33年（1958）には毎日会館南館がオープン。2階に毎日ホールが誕生し、同年に完成したフェスティバルホール（2013年再開場）やいち早く桜橋に登場していたサンケイホール（サンケイホールブリーゼとして2008年再開場）と共にエンタテインメントの中心も担う。南館の地下にできた名画座の大毎地下劇場（1993年閉館）は映画ファンで連日にぎわった。

手前から毎日新聞大阪本社、毎日大阪会館北館、同南館。右手の高層は近鉄堂島ビル。新聞社を出るとすぐに四つ橋筋、という構造だった（1989年11月撮影）。堂島アバンザの公開空地には旧大阪本社の石造正面玄関が復元されている（下の写真）。

わたしの堂島物語 ②

変わりゆく堂島に寄り添った毎日新聞。

迫田 太さん
元毎日新聞大阪本社代表

私の入社は昭和29年（1954）。大阪本社勤務は10年後ですが、堂島は行くたびに街が変わる印象がありました。昭和40年頃までは遠方取材に伝書鳩を連れて行き、フィルムを入れた筒を背負わせて堂島本社まで飛ばしていました。

北新地は上司などに誘われて［あざみ］や［ラモール］などの高級クラブに同行した程度で、一人ではとても。夜遊びの豪傑は、給料日に集金を逃れて通用門から出ていましたが、ママさんたちに待ち伏せされていたようです（笑）。大事件が起きると近所の雀荘にまず電話です。天六のガス爆発（1970年）、千日デパート火災（1972年）などは雀荘から記者を現場に行かせました。

昭和62年（1987）に転勤、平成3年（1991）に戻ってみると、自分が本社代表として堂島を去る役割だと知りました。本社社屋取り壊しの際に、竣工時に使われた松の丸太が大量に出てきましたが、腐ることなく屋台骨を強固に支えていました。

Ⅱ 近代化する街

堂島小学校の設立と、その歩み。

堂島連合振興町会のシンボルマークは、堂島の「堂」の字に稲穂があしらわれている。かつて堂島に米相場があった歴史を受け継ぐデザインだが、もともとこのマークはかつて堂島にあった小学校の校章だった。

明治維新直後に設立された三つの小学校が統合され、堂島小学校となったのは明治16年（1883）のこと。堂島浜通2丁目、現在の渡辺橋北詰あたりである。その後、堂島船大工町に移転したが、明治42年（1909）の北の大火で校舎を失ってしまう。木造の仮校舎を経て、昭和4年（1929）に再び堂島浜通2丁目に新築移転した際には、高等科を設置し、大阪市堂島尋常小学校となっていた。

この時の校舎は鉄筋コンクリート造の堂々たるもので、官公庁の建物かと思わせるような威厳を感じさせる。現在も小学校跡地に残る石碑に刻まれている校歌がつくられたのもこの頃。「煙の大阪 名に負う米市 徽章は垂穂よ」という小学生が唄うにしては実に風格のある校歌は、昭和10年（1935）、北原白秋・山田耕筰の名コンビによって作詞作曲された。

堂島小学校は俳優・森繁久彌氏の出身校としても知られているが、その草創期から名門として市内に名を轟かせていたようだ。100周年を機に編まれた「どうじまPTA新聞」に、大正7年（1918）の卒業生、大澤美栄さんの手記が載せられている。

「私共の友達は、浜の旦那衆と云われる番頭、丁稚にかこまれた環境の子女、医学博士、教授、控訴院長、裁判官、弁護士、日本銀行支店長等の令息、令嬢のインテリ層から、美しい芸者衆の卵、置屋のかわいい娘さん等々、とりどりの生徒色で恵まれた日々を楽しく無邪気に通学しました」

こうした子どもたちが、「中之島公園でのテニス練習」をしたり、「図書館へ自習」に行ったり（府立中之島図書館のことだろう）していたというのは、堂島ならではだ。

また、戦前・戦中には文部省によって体育の研究指定校に指定されていた。そのため、児童たちは毎日校舎の周囲を走り、雨の日でも校舎内の廊下や階段で行進の練習を行っていた。当時、伊勢神宮に参拝へ行くと、堂島小の児童たちが行進する様子があまりに見事で、参詣の人々が思わず目を見張って立ち止まったのだという。

大阪市内への空襲が激しくなると、堂島小の児童および職員たちは滋賀県へと疎開し、児童の多くはそこで終戦を迎えることになった。終戦後、大阪へ戻ったものの、昭和21年（1946）から児童数減少のためにやむなく曽根崎小学校に統合された。鉄筋4階建ての校舎が新築され、堂島小学校として復校するのはその13年後、昭和34年（1959）のことだった。この背景には、地域の人たちの熱心な働きかけがあった。戦後、街が復興を遂げていく中、小学校を再び地元に取り戻したいと願うのは当然のことだった。むしろ、小学校が甦ってこそ真の復興だと考えていたのかもしれない。

昭和47年（1972）、めでたく創立100周年を迎えた堂島小学校だったが、児童数減少の流れは止まらず、曽根崎小学校との統合が決定し、昭和61年（1986）3月、最後の卒業生を送り出した。現在、その跡地には堂島会館（P37）が建ち、グラウンドでは夏の盆踊りなどが行われ、地域の人たちの憩いの場として今に生き続けている。

昭和8年

昭和4年に完成した新校舎。地上3階、地下1階。
図面によると屋上にも運動場があったという。

昭和37年

昭和34年、堂島小学校として復校する際に
新築された校舎。翌年にはプールも完成した。

大正5年

大火によって校舎を失った後に建てられた木造の仮校舎。建物を増築しながら、20年ほどここで過ごした。

※大正5年ごろの堂島小学校

閉校する前、
昭和40年代の運動会の1コマ。

【堂島小学校 年表】

明治5年　7月1日、堂島浜通2丁目、渡辺橋北詰の西小学校（改称後）を設立。（※現在のサントリー本社ビルのあたり）

8月5日、米仲買集会所跡に堂島東小学校（改称後）を設立。

明治6年　3月12日、曽根崎新地3丁目助成橋北詰に北新地小学校（改称後）設立。

明治16年　10月3日、堂島西小学校、堂島東小学校、北新地小学校の3校を堂島西小学校の位置に合併、堂島小学校とする。

明治32年　9月10日、堂島船大工町13番堂島裏1丁目8番地の堂島東小学校跡地に移転。（※現在の梅田新道ビルのあたり）

明治35年　4月1日、大阪市堂島尋常小学校と改称。

明治42年　7月、北の大火で校舎が全焼。仮校舎を建てる。

大正13年　4月1日、高等科を併置し、大阪市堂島尋常高等小学校と改称。

昭和3年　4月1日、高等科を廃止し、大阪市堂島尋常小学校に改称。

昭和4年　11月20日、堂島浜通2丁目12番地の1に新築移転。（※現在のNTTテレパーク堂島第1ビルのあたり）

昭和16年　4月1日、学制改革により国民学校となり、大阪市堂島国民学校に改称。

昭和19年　大阪市内への空襲を避けるため、滋賀県への集団疎開が始まる。

昭和20年　10月30日、終戦により疎開解除となり、全員帰還する。

昭和21年　4月1日、堂島国民学校は休校となり、曽根崎国民学校に併合される。

昭和34年　4月1日、北区堂島北町33番地の1に、鉄筋4階建て校舎が新築され、大阪市立堂島小学校として復校する。（※現在の堂島会館・ふれあい広場の位置）

昭和38年　4月20日、校外学舎（兵庫県川西市黒川）の落成式を行う。

昭和47年　10月21日、創立百周年記念式を行う。

昭和60年　9月27日、堂島小学校と曽根崎小学校の統合が決定する。

昭和61年　3月24日、堂島小学校閉校式ならびに閉校記念式を行う。

わたしの堂島物語 ③

堂島小は体育も勉強もスパルタでした。

樋口一郎さん
元・堂島小学校生

私は昭和7年（1932）生まれで、小学校3年生の時に天王寺から堂島小学校に転校してきました。実家は帽子屋で、小学校のすぐ近所にありました（右上写真）。

当時、堂島小は文部省の体育研究指定校に指定されていた関係で、本当にスパルタでした。毎日朝と昼の2回、体力を付けるためだと中之島まで走らされていました。剣道や柔道もやっていましたし、勉強も厳しかったですよ。遊びと言えば、堂島川で釣りばかりしていましたね。川の魚（フナやコイ）と海の魚（ハゼやセイゴ）が入り混じっていたのを覚えています。春には稚アユやウナギなども釣って食べた記憶があります。

定年退職し、それまで住んでいた堺から引っ越そうかと考えていた矢先、今住んでいるマンションの広告を見たら、本籍と1番地違いなんです。それで即決しましたね（笑）。堂島小に通ったのは短い期間でしたが、校歌は今でも覚えていますよ。

II 近代化する街

戦前の堂島の街並み。

【大正～昭和初期地図】

古老の覚書である『堂島物語』を元に、大正～昭和初期の堂島の様子を大正15年（1926）の地形図上に復元した。明治44年地籍図（P10）ほどの精度はないものの、地籍図では記載されていなかった商店など、ヒューマンスケールな視点から当時の堂島の風景がうかがえる。

戦前の堂島に共通した傾向ではあるが、引き続き明治時代からの各エリアの特徴が継承され、発展している。一方、毎日新聞社が地区の中央に新たに立地している。新聞販売店もたくさんでき、大阪のメディアセンターとしての片鱗を見せている。

明治44年地籍図と比較すると、わずか15年の間に蜆川が埋め立てられ、曽根崎新地と堂島裏がつながったことによる変化がよくわかる。また、天満の裁判所や地区内の官舎の影響からか、大正～昭和初期は地区全体に弁護士事務所が多いのも特徴である。

今回の地図上に個人家屋の表記は掲載しなかったが、『堂島物語』では商店主や住民たちの思い出話がたくさん記載されている。貴重な資料であり、ぜひ一読して頂きたい。

大阪市役所があった場所には、現在も記念碑が建っている。

※町名境界は明治44年地籍図の範囲を元に表記
※曽根崎新地・永楽町・曽根崎上と西部は『堂島物語』に地図なし

① お茶屋が多く、引き続き社交の中心に。

（曽根崎新地1・2・3丁目、曽根崎永楽町、曽根崎上3・4丁目）

北新地には、大正7年（1918）末の統計で芸妓置屋11軒、貸席153軒、芸妓825名が在籍。昭和12年末の統計では芸妓置屋9軒、貸席155軒、芸妓610名が在籍していた（P6）。江戸時代には曽根崎新地であった歴史が、昭和に入ってもそのまま受け継がれていたと言えるだろう。

② 大阪毎日新聞の本社ビルが完成。

（堂島船大工町、堂島裏1・2・3丁目、堂島中1・2丁目、堂島北町）

堂島座の成績が思わしくなく、大正3年（1914）に大阪毎日新聞社が土地を買収。大正11（1922）年に本社ビルが落成した（P12）。大正～昭和初期の地図では旅館と新聞関係の店が多いのが特徴である。大正12年（1923）、堂島中2丁目に竹中工務店本店が移転。昭和12年に株式会社に改組した。また、大正15（1926）年時点では大阪市立堂島幼児園が見られる。

堂島ビルディング

堂島ビルディングの設計・施工は竹中工務店。1階には三井・山口・大阪貯蓄の3銀行を設け、2階は堂ビル百貨店、5階は中山太陽堂、7・8階は堂島ホテル、最上階9階は紳士社交倶楽部の清交社であった。
（大阪市立中央図書館蔵）

③ 伝統的な商売街区。大阪の産業の拠点に。

（堂島浜通1・2丁目）

大正2（1913）年、堂島浜通2丁目に大阪窯業本社（後の住友大阪セメント）が置かれる。大正10年頃には東洋一の工場として日本のセメント生産高の約1割を産出した（後に新ダイビルに移転）。大正9年には大阪紡績会社が堂島浜通に移転。当時の日本の産業の中枢を担った企業が集った。また、大江橋すぐ北の御堂筋沿いに3つの銀行が入った堂島ビルディング（1923年）などのオフィスビルも建てられた。この他、日本電気協会関西支部が分離独立し、大阪に中央電気協会を設立。大正3年に中央電気倶楽部が建設された。

④ 大阪市役所が置かれ、公的エリアの性格強まる。

（堂島浜通2丁目、上福島1丁目）

昭和3年（1928）、大阪商業会議所は大阪商工会議所に改組する。明治45年（1912）には木造の大阪市役所仮庁舎が置かれたが、大正10年（1921）に中之島に移転した。その場所には堂島小学校が移転し（1929年）、第二次世界大戦が終わる頃まであった。大正14年（1925）、知事会館跡地に大阪中央電信局（P26）が新築。昭和3年に内外の設備が完了し、移転した。

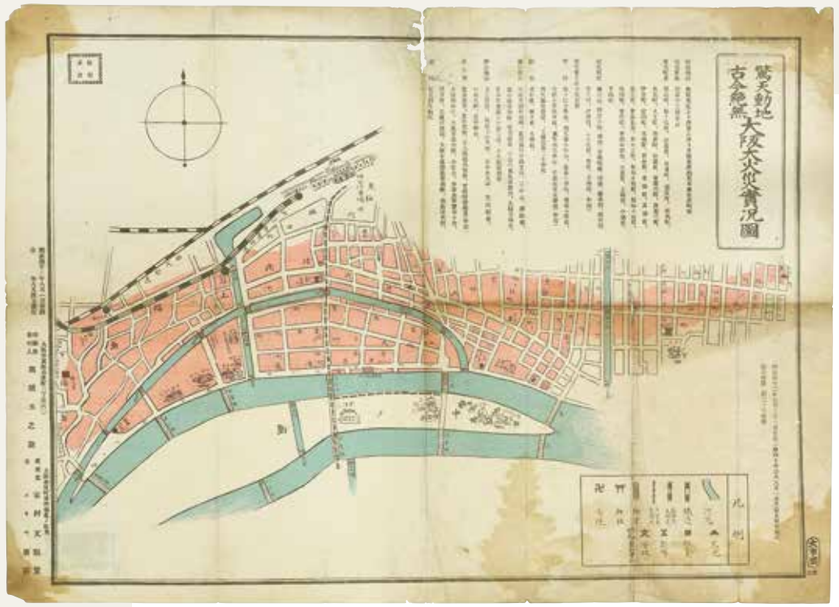
商業会議所（商工会議所）の外観。
『大阪府写真帖』より（大阪市立中央図書館蔵）

北新地

——「社交料飲」の街になるまで

文・写真／江 弘毅
140B編集責任者

現在は「社交料飲」の街である北新地は、
どのような前史を持つのか。
江戸時代以来の史料と、
人々の語りによって、その歴史を紐解く。



北の大火の被災状況を描いた「驚天動地古今絶無大阪大火災実況図」（1909年／大阪市立中央図書館蔵）

「北の大火」と蜆川の埋め立て。

江戸時代からの遊里であった堂島新地と曽根崎新地を合わせて「北新地」と呼ばれるきっかけになったのが明治42年（1909）の「北の大火」。

当時の絵図を見ると、天満から強風にあおられ西へ「延長約二里」（俗に「天満焼け」と称された）、堂島川の北側を焼き尽くし、福島まで燃え広がったさまが見える。北区役所、大阪控訴院（裁判所）、堂島米穀取引所、大阪高等商業学校、堂島小学校などが焼失し、大江橋、桜橋、梅田橋、蜆橋など11橋が焼け落ちた。

その結果、曽根崎川が両岸の瓦礫によって埋め立てられる。そして街区整理のあと、この元遊里の一帯は、芸妓の「置屋」「席貸」と呼ばれる「お茶屋」だけが許されることになる。ちょうどこの時、大大阪時代の幕開けとなる時期で、財界の発展とともに新しい北新地が社用族の遊興の花街として繁盛する。

ちなみに「北の大火」からわずか6年後の大正4年には、今の桜橋交差点南西側に「北陽演舞場」が新築されている。大林組の施工で白木造りに銅ぶき屋根の立派な建物だった。

大正4年に建てられた北陽演舞場の見事な建物。
『北新地社交料飲協会創立50周年記念誌』より

明治・大正時代の北新地の雰囲気。

大阪の花街の特徴は、芸妓を差配する統一的な「検番」が組織されずに、「(扱)席」と称される複数の店が独立営業する制度であった。大正7年(1918)の記録には、芸妓置屋(席)11軒、席貸(お茶屋)153軒、芸妓825人と記されている。

戦前の曽根崎新地については元朝日新聞記者の篠崎昌美氏が『続・浪華夜ばなし』(昭和30年・朝日新聞社刊)でこう書いている。

浄正橋から出入橋を経て梅田橋にかかると、もうそこは北新地の入口で陽気な空気がみなぎっていた。その花やかさは南地のような騒がしさはなく、何となく親しみのある気分であった。(略)

桜橋の橋上より東方を見渡すと、川の両側は石崖造りの上に、川の半分乗り出すように茶屋の奥座敷がずっとならび、両側の家から手でも出せば握り合うことができるように狭く見え、それがまた美しく、満潮の澄み渡った川水にさかさに影を宿して動いている。夜に入るとあかり障子に透けてお客や芸妓のシルエットが揺れるのも面白い。

篠崎氏は明治25年(1892)西区生まれ。まだ曽根崎川の下流が埋め立てられる前の北新地だと推測できる貴重な文章だ。

また大正から昭和初期にかけての北新地のようすは写真で見る限り、京・祇園のお茶屋や料理屋の町家よりも大ぶりな構造の建物がずらり並んでいて、今とはまったく違った光景だ。

戦争直後の北新地。
——お茶屋「鶴太良」女将・家原ハツさんの話

太平洋戦争で街のほとんどが焼失した北新地は再び復興するが、高度経済成長に合わせて伝統的な花街はその姿を変える。

お茶屋の「鶴太良(つるたろう)」の女将さん、大正9年(1920)生まれの家原ハツさんの聞き書きから記述していく。

＊　＊　＊

わたしのおじいさんは明治大正年間に洋食屋をしていました。「北陽軒」という店で、今の曽根崎新地「スエヒロ」のところでした。昭和2年(1927)に祖父が、スエヒロの初代主人に店をあげはった。スエヒロの初代主人は「もらわぃでか。その代わり約束する、日本一の洋食屋になってみせる。それが恩返しや」と言うたと聞かされてます。

それで曽根崎新地から堂島へ移りました。大きな演舞場もおましたな。

戦争で北の新地は丸焼けになってしもて、うちもようけあった借家も皆焼けて、一晩で貧乏になりました。また新円の切り替えもあって、女ですからなにも分かれへんかった。

母の友人に、清元延栄さん(女流清元界の第一人者)という方がいて、「何にもゆうことない、芸妓はんに出なさい」と言った。お母さんは「こんな顔悪い娘やから、とんでもない」と言いましたが、延栄さんは「いや、わたしが芸、教えてみせる」と言うてはった。ええお師匠さんでした。

頼むから商売してくれ、とスエヒロの初代は言いましたが、「これがこのコの運命やから放っといて頂戴」と母は言うてました。

若いけど声がよかったんでっしゃろ、そこから清元一本でいきました。

戦前の子どもの頃の記憶ですが、夏なんか夕方になったら床几出して、芸妓さんが腰かけて団扇であおいでる。いつお花かかってもエエように、頭はきちっと結うて浴衣着て、情緒がありましたな。

昭和28年(1953)の節分の日に、ここ真砂(まさご)町(実際には西天満4丁目7-19)に建物を建てました。5年間やった芸妓をやめて、芸名「鶴太良」を屋号にして、お茶屋をしたんです。隣も瀧本さんというお茶屋さんでした。

新地のお茶屋さんは、戦後でも(その頃)百何十軒、いやもっとあったんちゃいますか。「席」が芸妓さんを養成していて、お茶屋さんから声がかかるんです。まだ芸妓さんは300人はいてたんちゃいますか。

昔の宴会はお茶屋さんでもやってて、お客さんが来はったら、ゆっくり風呂へ入ってもろて浴衣に着替えて宴会しはる。料理屋さんにもお風呂がありました。

お茶屋さんは仕出し屋さんが出入りしていて、うっとこに来てたタムラさんというおもしろい仕出し屋さんで注文料理してくれるんです。お肉やら鶏やら鉄板の上でじゅうじゅういわせながらクルマで何回も持って来はる。新御堂筋

昭和初期の北新地の様子。『北新地社交料飲協会創立50周年記念誌』より

北新地
——「社交料飲」の街になるまで

家原ハツさん

曽根崎新地に生まれる。18歳から5〜6年ほど、宗右衛門町の老舗お茶屋「富田屋」で仲居として勤める。戦争で「富田屋」が被災したため、一時芦屋に疎開。戦後、周囲の勧めで芸妓に。昭和28年(1953)に真砂町にてお茶屋「鶴太良」を開いた。

大正〜昭和初期に撮影された芸妓や若旦那衆の写真。家原ハツさんの「鶴太良」に伝わるもの。『北新地社交料飲協会創立50周年記念誌』より

がまだなかったがために、すっすっと持ってこれる。

午後10時以降、新地にクルマが入られへんようになったんで、クルマで2次会寄ろかという人が来られへんということで、伊東さんやら、こっちへ移ったお茶屋も多いです。

戦後すぐにサントリーバーみたいなのができてきたり、ビルヂングが建ったり北の新地も変わりました。おっきいお料理屋さんお茶屋さんがおっきなビルヂングになる。尼信（昭和43年に浪速信用金庫として開業）のビルヂング建ったときに、「こんなところにけったいなもんが建ったなー」、と思いました。

昭和40年代になると一般的に接待しはるんが現場レベルの人になって、芸妓さん呼ばなくなった。オーナー社長のお座敷とちがって、芸者さん呼んでまでしなくなった。

ある企業トップの常連さんは、2階へ上がらずに火鉢の燗胴壺で燗して酒ついで、1階の火鉢の前で座って飲む人もいました。お正月なんかも京都の祇園町や先斗町からも何人も（芸妓を）連れてきて、北の新地からも5人呼ぶんですよ。ここの箪笥も向き変えて（1階に）広々として入れるようにしたこともあります。

三味線弾いて、踊れて。変わった人やなあ、言うてました。「お母さん」て呼んでくれへん、「おばはん、頼んまっせ」言わはる。「ぼんぼん」「ぼんち」です。

そういうのが多かったです。ここでし始めた頃は、お旦那衆がまだいてて、（違う客の場合）「銀行屋さんが来はるんやて」「会社員やて」言うてました。

お茶屋さんからバーやクラブに変わったんですわ。芸妓さんもホステスに変わりました。うちもそうですが、古いおうちは雨漏りをするわで、瓦の葺き替えで高くつくんです。お茶屋さんやめてビル建てた方が…。そういうのでお茶屋さんが減っていった。

ここらは堂島小学校で、わたしも行ってました。今と場所と違いまして、堂ビルの渡ったとこにあったんです。お風呂屋さんもここら辺に2軒あって、一軒は「ともえ」というお風呂屋さんで、「老松アパート」があって、こまか姉さんら住んではった。

今の北の新地ですか。その頃の面影、まったくないです。日本家屋建ってるとこないですもん。

＊　＊　＊

花街の日常。
――西川流師範・西川梅十三さんの話

続いて、西川流師範の西川梅十三さんに登場願おう。昭和13年（1938）生まれで、昭和28年から40年あまり北新地で芸妓を勤めていた。花街・北新地の日常についての聞き書きをする。

＊　＊　＊

平田席に所属してました。わたしらの時は立方、地方さん含めて100人ぐらいはいてはったんちゃいますか。大西席が一番多くて180人ぐらい。ほかに北店、富田とみなで4つの席がありました。

お茶屋さんは船大工や永楽町にもあって、全部で30軒ぐらいやったと思います。

毎日何かお稽古あるから、昼2時ぐらいまで、（新地）本通りの大西席の稽古場にあったんです。お風呂入ってお化粧したりして、夕方5時ぐらいになると、お声かかってる「花外楼」や「さか卯」「つる家」「なだ万」「吉兆」とかの料理屋さんのお座敷に（北新地から）みな入ってました。

そのあと二次会でお茶屋へ戻る、というのがお客さんのマナーというんですか、必ずのコースです。その時分はバーはありまへん。そこで「ゆっくり遊ぼか」。「ごくろうさん。商売あんじょういったから、好きなもん取ってもらいや」て言うていただいたり。と思えば「あそこ（の踊り）間違ごとったで」とか、なぶられたりもします。そんなことあらしませんけど（笑）。

北新地はよそに比べて芸事に気迫があるんです。踊りだけというのはほとんどありまへん。お囃子、清元、長唄、常磐津と稽古して、年に一回甲乙がつく試験があったんです。「お茶屋の水大学夜間部」です（笑）。

＊　＊　＊

ちなみに現在、北新地の芸妓さんは大西席に1人、平田席に5人いるだけ。お茶屋さんはもうない。北新地といえばクラブやラウンジの社交料飲の街という図式が定まって久しい。

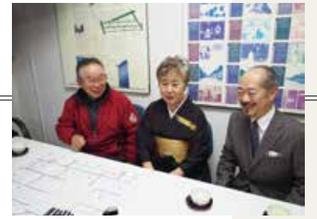
北新地
――「社交料飲」の街になるまで

昭和28年（1953）、産経会館で行われた「北新地温習会」の解説付き番組。西川梅十三さん提供

西川梅十三さん

京都で生まれ、9歳から西川流の日本舞踊を習い始め、先代の家元西川鯉三郎の子役を務めた。昭和28年（1953）、梅十三の名前で北新地の芸妓に。平成11年（1999）に芸妓を引き、現在は西川流師範の西川梅十三として活動。大阪、東京、名古屋などの踊りの会に出演する一方、後進の指導も行っている。

北新地の目指すもの。



右から、北新地社交料飲協会理事長の東司丘興一さん、同副理事長も務める山名和枝さん、堂島連合振興町会の山本弘澄会長。

「東の銀座、西の北新地と称される高級歓楽街」「クラブや料亭が密集する夜の街」などと形容される北新地だが、このところの長引く不況でその様子が変わりつつある。

情報誌やテレビのバラエティ番組では「北新地に新世界の串かつ店が進出して人気」「スペインバルや立ち呑み居酒屋など、接待客から自腹客へ」という切り口の特集が多い。グルメ誌などでは「北新地のランチ」という取りあげられ方も見る。「社交料飲の街」がまさに変貌しつつある。

高度経済成長期から、北新地とりわけ「クラブ」の世界を牽引してきた「クラブ山名」の山名和枝さんは、昭和34年（1959）にこの世界に入った。最初に勤めた「クラブ・アロー」は大型のナイトクラブで、アイ・ジョージや坂本スミ子が専属歌手を務めていた。客は政財界のトップクラスばかりで、トリオ・ロス・パンチョスなど海外大物のライブも入って「こんな華やかな世界があったのか」と思った。そのあとすぐに北新地のクラブ「B&B」に移った。日給2,000円という超高給でホステスを集め、大いに話題になった。ホステスは100人を優に超えていたという。

どのクラブも大型で、客は5～6人が当たり前。大人数でクラブからクラブへと飲み歩く光景が日常だったとのこと。クラブの興隆は昭和48年（1973）のオイルショックあたりまでで、東司丘興一さんによると昭和50年代はじめ頃からクラブより小さな規模でホステスも少ない「ラウンジ」が増えたとのこと。ちなみに「ラウンジ」という店舗カテゴリーは大阪が発祥らしく東京にはない。

バブル崩壊後、とくに企業の接待交際費が削減されると、接待や社用の客が激減し大打撃をうける。「社交業から飲食業への転換と客の多層化」（東司丘さん）が進む。けれどもよその街にはない「あこがれやステイタス」「粋な感じ」はまだまだ健在だ。その空気感をささえているのは、店数が減り衰退したとはいうもののクラブやラウンジにほかならないのだ。「（大衆的な）流れを取り込むかたちで、社交場としての地位を守っていくのがわれわれの使命」と東司丘さんは語る。そのうえで山名さんは「交際費を使いなさいという流れがあれば、あっという間に人で一杯になる」と笑う。

堂島に引き継がれる「電電建築」の系譜。

III 戦後の発展

文／髙岡伸一
建築家・大阪市立大学特任講師
写真／西岡 潔

1912年に建てられた大阪市役所の仮庁舎。手前の川は大阪駅と堂島川を繋いでいた南北の入堀。現在は埋め立てられて阪神高速が通っている。『大阪府写真帖』より（大阪市立中央図書館蔵）

堂島には、その名も堂島ビルヂング（1923年・P16）や大江ビルヂング（1921年）、中央電気倶楽部（1930年）といった大阪を代表する歴史建築が建っているが、明治から戦後の高度経済成長期までの近代全体を通観する上で、現在の堂島3丁目、NTTテレパーク堂島という場所を見過ごすわけにはいかない。現在のようにNTTグループのビル群が建ち並ぶ前から、この地には大阪の近代史上重要な施設、そして日本の近代建築史に残る建築が建てられてきた。本稿では、NTTの前身である日本電信電話公社、電電公社時代に建てられたいわゆる「電電建築」までを対象に、この地に建てられてきた建築を辿ることで、堂島の近代～戦後史を紐解いてみたい。

テレパーク前史。

他のページでも触れられていることと思うが、江戸時代の堂島西部には、中之島と同様に諸藩の蔵屋敷が並んでいた。テレパークの南東角あたりに記念碑が3つ並んで立っているが、その一つはこの地に大村藩蔵屋敷があったことを示している。明治維新の版籍奉還によって大名の領地は国に返還され、その土地が近代化の基盤となり、官庁や工場が建っていくことになるわけだが、ここで登場するのが、あの五代友厚だ。

五代は明治9年（1876）、この地に国産の藍染工場「朝陽館」を設立した。現在のテレパーク全域を敷地とする従業員300名超の大規模な工場で、当時まだ未熟であった国内の製藍の近代化を図り、インドからの輸入に対抗して日本の産業に育てようとしたものだ。明治10年（1877）に明治天皇が朝陽館に行幸されるなど全国的に大きな注目を集めたが、残念ながら事業としてはうまくいかず、明治16年に閉鎖となった。

大阪における五代の業績は数多いが、もっとも重要なものの一つが現在の大阪商工会議所、大阪商法会議所の設立（1878年）だろう。実は会議所は当初、朝陽館内に設けられた。その翌年には船場の高麗橋に移るが、明治24年（1891）に再び堂島のこの地に戻ってくる。そのとき既に朝陽館は閉鎖されており、現在のテレパークの南東の角に、新たに近代建築が建設された。

大正11年（1922）に改築された際の設計が、大阪の近代都市計画において指導的な役割を果たした片岡安。片岡は東京駅や日本銀行の設計者として知られる建築家・辰野金吾と共同で大阪に事務所を構えていたが、この年に独立して片岡建築事務所を設立している。堂島川に面して建つその姿は、絵葉書などによく登場する。大阪商工会議所は昭和43年（1968）に現在の本町橋近くに新ビルを建設して移転するが、それまで五代友厚公の像もこの堂島にあった。

明治42年（1909）の北の大火によって堂島全体は壊滅的な被害を受けるが、その焼け跡に建てられたのが大阪市庁舎だった（1912年）。これは木造の仮庁舎で、当初市役所は大阪府庁舎のあった江之子島に隣接して設けられたが、大正10年（1921）に現在の中之島の地に本庁舎（現庁舎の先代）が完成するまでのおよそ10年間、大阪市役所はこの地にあった。

その他にも大阪市立大学の源流でもある大阪商業講習所（これも

片岡安によって設計された、堂島川に面する大阪商工会議所。
（大阪市立中央図書館蔵）

山田守が設計した大阪中央電信局。
両端のアーチ状の屋根が特徴的。
提供／NTTファシリティーズ

山田の同期であった森泰治の
設計による大阪中央電話局。
提供／NTTファシリティーズ

五代の発案）や、大阪府立商品陳列所、そして知事官舎など、近代大阪の礎を築いた施設がこの堂島の地に入れ替わり建てられた。

「電電建築」の登場。

少々前置きが長くなってしまったが、この場所に最初の「電電建築」が登場するのは昭和2年（1927）。田蓑橋北詰の堂島川沿いに、電信を管轄する大阪中央電信局、その北隣に電話を管轄する大阪中央電話局が建てられた。

ここで日本の電信電話の歴史を簡単に振り返っておくと、明治の内閣創設に際して設けられた通信省にさかのぼることができる。これは電信等の通信と、郵便を管轄する官庁だった。それが戦後（1949年）に廃止されて郵政省と電気通信省へと分離され、電気通信省が公社化されて電電公社が発足した（1952年）。その後、電電公社がNTTとなり、郵政省も民営化されていくのはご存じの通りである。

従って昭和2年に堂島に現れた二つの近代建築は、逓信省時代の電信・電話部門の大阪における基幹施設ということになる。とりわけ注目すべきは大阪中央電信局のデザインだ。装飾を排した合理的な外壁の構成と、アーチを多用した個性的な屋根の組み合わせは非常に斬新な建築として注目を浴びた。

設計したのは逓信省に所属していた建築家・山田守。山田は日本の近代建築を代表する建築家の一人で、関西圏で現存するものとしては、独立後の京都タワーがよく知られている。また東海大学の設立に尽力し、その校舎も手がけた。山田は新時代の日本の建築を目指して建築の「芸術性」を声高に主張した若者のグループ、「分離派建築会」のメンバーだった。

旧態依然とした日本の建築界に革新をもたらそうとした血気盛んな若者が役所に入省するというのは、どうもイメージが湧かないかもしれないが、当時逓信省には才能溢れる建築家が多く集結し、日本の近代建築を先導する組織の一つであった。逓信建築のもう一人の雄に同年代の吉田鉄郎がいるが、吉田は郵政系の建築を手がけ、その集大成として完成させたのが大阪駅前にあった大阪中央郵便局であった。この建築は残念ながら2012年に解体されてしまったが、戦前期の日本における近代建築の極北ともいうべき名建築である。

大阪中央電話局の方を設計したのは森泰治で、偶然にも山田の同期。こちらはクラシックなルネサンス風のデザインで、山田の電信局とのコントラストが面白い。森の方はすぐに宮内省へ異動するので実績は多くないが、設計に際しては同期どうし、強いライバル心があったのではないだろうか。

なお、山田は大正14年（1925）、大阪の前に東京中央電信局を完成させているが、そのデザインは大阪とよく似ていて、山田のこの時代の代表作に挙げられるのは東京の方だ。山田自身も大阪は二番煎じという思いがあったらしく、あまり気に入っていなかったようである。

「電電建築」初の高層ビル誕生。

その後、逓信省から電電公社へと組織を変えつつ、この堂島の地に少しずつ敷地を広げ、街区は電電建築が集中する特徴的なエリアへと変貌していった。現在の街区北東にある堂島第1ビルは大阪市外電話局として昭和35年（1960）に、南西角の中央電信局があった位置には、現在の堂島第3ビルが福島電話局として昭和44年（1969）に建てられた。

電電公社になってからのビルで、最も注目すべきはやはり超高層ビルの大阪堂島電電ビル、現在のNTTDATA堂島ビルだろう。日本では昭和43年（1968）に初の超高層ビルとして霞が関ビルが完成し、大阪でも昭和48年（1973）に100mを超える超高層ビルが2棟完成している。そういう意味では、昭和49年（1974）に完成した25階建120mのビルは、画期的な存在とは言えないかもしれない。

しかし電電公社としては逓信建築史上初めての超高層への挑戦であり、今後の高層電電ビルのプロトタイプとして、公社にとっては一大プロジェクトであった。一般のオフィスビルとは異なり、情報設備を集約した超高層は前例がなく、現在の通信企業各社が建てるデータセンターの先駆けとも言える。

最も特徴的なのはその外観で、一見するとシャーベットグリーンの壁のように見える部分には、プロフィリットガラスと呼ばれる当時オーストリアから輸入した特殊なガラスが使われている。コの字

現在のNTTDATAビル。ガラス色
に見える部分には、すべてプロフィ
リットガラスがはめ込まれている。

上／竣工時のエレベーターホール。上部の大きな四角は水害から設備を守るための防潮扉（災害時に下降する）。表面にはレリーフが刻まれている。
下／竣工当時のエントランスホール。
提供／NTTDATA
撮影／川澄明男

竣工当時の堂島ビルの夜景。プロフィリットガラスが全面点灯している様子は、現在では見ることはできない。下に旧大阪商工会議所の建築が見える。
提供／NTTDATA　撮影／川澄明男

オープンスペースに設けられたステンレスの噴水。背景の藍色のタイルは朝陽館へのオマージュだろうか。

型の断面を持ち、通常の板ガラスと違って枠を必要とせず、強い風圧にも耐えられる素材だった。

　通信設備が並ぶデータ局舎であるから特にガラスの開口は必要ないのだが、設計を担当した松田正司は、遠方からでも望見できる超高層ビルの外観は、不快であったり不安感を持たせるものであってはならないと考え、「何とかクリスタルな感じの壁面を作りたい」と思って、コストや強度等の課題を検討し、このプロフィリットガラスを採用した。プロフィリットガラスは21世紀に入ってから再び流行して、一時期建築家の伊東豊雄や長谷川逸子が好んで使っていたが、全国を見渡しても、このビル以上にこの素材を大胆に使った例はない。

　テレパークは建物周囲のいわゆるオープンスペースも特徴的だ。堂島電電ビルを建てる際に、街区全体を都市計画上の特定街区として各種の特例を得た代わりに、都市空間への貢献として、広々とした屋外空間を全体的に整備した。各所のデザインには当時のオリジナルがよく残っていて、ステンレスの噴水や人工地盤に設けられた庭園、各所に点在するオブジェや換気塔など、いかにも1970年代の大阪万博のテイストでデザインされている。この時代に憧れを抱く人にとっては、たまらなく魅力的な空間だろう。

　電電公社はその後、昭和60年（1985）にNTTとして民営化され、建築の設計部門は平成4年（1992）にNTTファシリティーズとして独立した企業となった。現在はNTT関連に限らず幅広く設計を行い、日本を代表する組織設計事務所の一つとなっている。

たかおか・しんいち
1970年大阪市生まれ。高岡伸一建築設計事務所主宰、大阪市立大学都市研究プラザ特任講師、大阪府立江之子島文化芸術創造センターチーフディレクター。設計活動と並行し、近代建築や戦後建築の再評価・利活用について研究・実践。戦後のビルを愛するグループ「BMC（ビルマニアカフェ）」メンバー。共著に『いいビルの写真集』（パイインターナショナル・2012年）、編著に『生きた建築 大阪』（140B・2015年）など。大阪市生きた建築ミュージアム推進有識者会議委員。

西側のオープンスペースに設けられた抽象的な石のオブジェ。

テレパークの南東角には、五代友厚による朝陽館の設立と明治天皇の行幸、そして大村藩の蔵屋敷があったことを示す記念碑が並んでいる。

駐車場の上に敷地の東西を貫通する人工地盤が設けられ、庭園が整備されている。

III 戦後の発展

「ドーチカ」ができた！

日本が高度経済成長期を迎える中、堂島にもそれを象徴するような出来事があった。「ドーチカ」こと堂島地下街の完成だ。

大阪市交通局が南北線道路（現在の四つ橋筋）地下に、地下鉄3号線（西梅田～大国町、後の四つ橋線）の建設計画を発表したのは、昭和38年（1963）2月のことだった。この報に触れた毎日大阪会館の営業部員は、地下鉄のトンネル工事のタイミングに合わせ、トンネルの上に地下街を建設するアイデアを思い付き、急いで上司に相談した。工事が終われば埋め戻されてしまうため、巨額な工事費がかかる地下街などつくれるわけがなく、第一、大阪市が計画を認めるはずがない。地下街実現のためには、迅速さが求められていた。

こうして毎日大阪会館は堂島の地下街プロジェクトを一気に進めていくことになるのだが、ダイナミックな発想といいスピード感といい、まさに成長期真っ只中の勢いを感じさせる。東京オリンピックを翌年に控え、東海道新幹線の建設が急ピッチで進められている頃だった。

とは言え、堂島には地下街を求める切実な理由もあった。当時の四つ橋筋は渋滞がひどく、歩道を歩く人たちの安全確保が問題になっていた。また、通勤ラッシュの軽減や堂島周辺施設への誘客などにも地下街は貢献すると考えられていた。また、建築基準法により当時はビルの高さが31ｍに制限されていたことも、地下街が求められた背景の一つであっただろう。

地下鉄計画が発表されてからわずか3ヶ月後、毎日大阪会館は毎日堂島地下街株式会社創立事務所を立ち上げた。就任したばかりの中馬馨市長に熱弁を振るい、市議会での承認を取り付け、一方で地元への説明を繰り返し行いながら、いよいよ地下街建設は具体的になっていった。着工したのは翌年10月。この時、施行に当たった大林組が採用したのは「ＯＷＳ工法」というもの。四つ橋筋の両側に1ｍ弱の幅の溝を掘って生コンクリートを流し込み、そのコンクリート壁をそのまま地下街の構造壁にするという方法だった。

計画時に大阪市に提出された際のパース。

テープカットの後、堂島小学校の生徒73人が小旗を持って通り初め。「地下なのに街がある!」と目を丸くしたそうだ。

開業から間もないドージマ地下センター。

1年9ヶ月の工事期間を経て、昭和41年（1966）7月1日、めでたく堂島地下街は開業を迎えた。大阪初の地下街というわけではないにもかかわらず、開業直後は連日15万人を超える人が集まる大盛況。新聞はこぞって「キタの新名所誕生」の見出しを打った。

「日本一明るく、涼しいショッピング・プロムナード」「日本一空気の綺麗な地下街」といったうたい文句にある快適さに加え、何より集まった70店舗がハイセンスな一流どころばかりだったことが挙げられる。開業後の様子を伝えた毎日新聞の記事によれば、ある店主は堂島の客を魚のアユに例えている。つまり、「スマートだが、逃げ足も早い」。実質的で高級なものがよく売れたといい、最先端に整えられた環境のもとで、店と客がどちらも意気込んでいたということだったのだろう。

今年、開業から50周年を迎えるドーチカは、現在、「和モダン」をテーマにしたリニューアルが進んでいる。半世紀前に大阪の人たちの度肝を抜いたドーチカは、今度はどんな姿を見せてくれるのだろうか。

工事中の様子。四つ橋筋の両側に、コンクリートを流し込むための溝が掘られた。

開業直後からこの大にぎわい。連日15万人以上が訪れたというから驚きだ。真夏だったが、「日本一涼しい」快適さが人気に拍車をかけた。店で働く人の中には「涼し過ぎて半袖で働いていたら風邪をひいた」という人もいた。

わたしの堂島物語 ④

昔は自動車のショールームがありました。

開業記念にコマーシャルソングも作られた。歌は奥村チヨ。「大阪の街 ドージマに ラブロマンスの 花が咲く かおる乙女の 黒髪が 白とグレーの 街を行く」。なんと艶っぽい歌詞か。

私の会社の事務所はもともと四つ橋筋沿いにありました。堂島1丁目交差点のすぐ南、四つ橋筋の西側に地下街の換気塔があるあたりです。昭和38年（1963）頃から地下街建設の話が持ち上がり、換気塔を設置する必要があると言われ、翌年12月に現在の場所に移りました。当時としては多額の買い取り額の提示があったのですが、それだけ地下街建設に対する思い入れがあったのでしょうね。

地下街への地元の人たちの反応はさまざまでしたが、街の発展につながるという声はやはり多かった。それまで地上を歩いていた人が地下を歩くようになり、雨の日などは大阪駅や梅田方面から濡れずに来られるというのは好評でしたね。今、南の端に中華料理店があるでしょう。あのあたりにスバルショールームがあったんですよ。当時としては目新しいものを集めていたのだと思います。

入江健一さん
堂島地域社会福祉協議会 会長

写真提供／堂島地下街株式会社

III 戦後の発展

昭和30〜40年代の堂島。

【昭和40〜41年地図】

昭和20（1945）年、渡辺橋北詰に「寿屋」が移転。昭和38（1963）年には「サントリー」に社名を変更した。寿屋は明治32（1899）年、鳥井信次郎が「鳥井商店」でぶどう酒の製造販売を始めたのが始まり。堂島の山本商会（自転車・スクーターの整備）と縁があった。

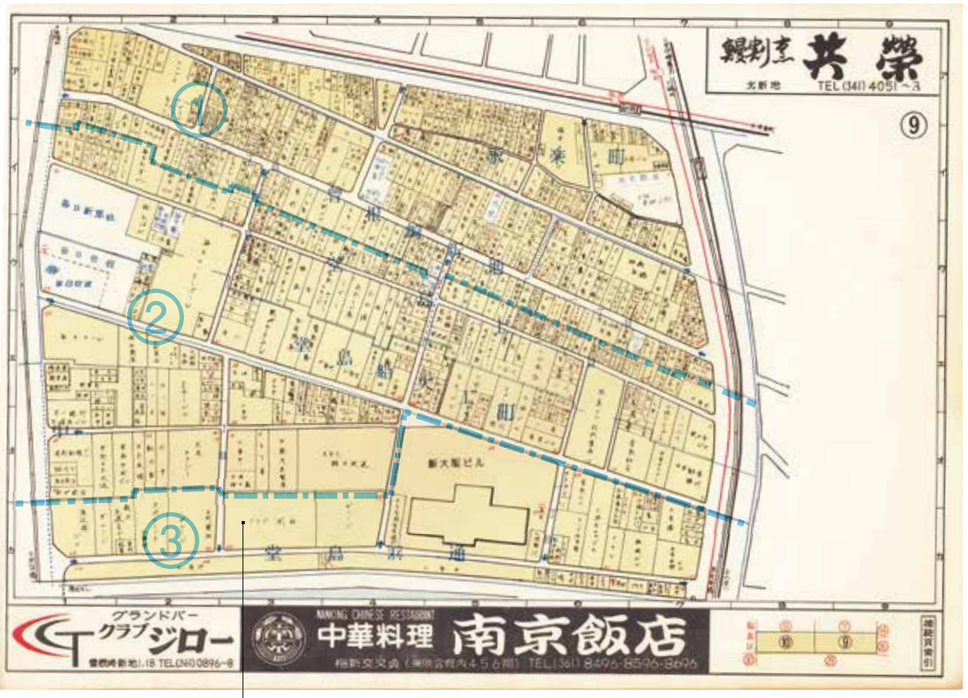
太平洋戦争の空襲により、堂島全域の多くの建物は焼失してしまった。それでもなお、戦後の堂島では江戸時代から続く伝統的な地区の性格を継承しようと努め、その当時のトレンドを取り入れつつ、それぞれの地区の個性を強めていった。

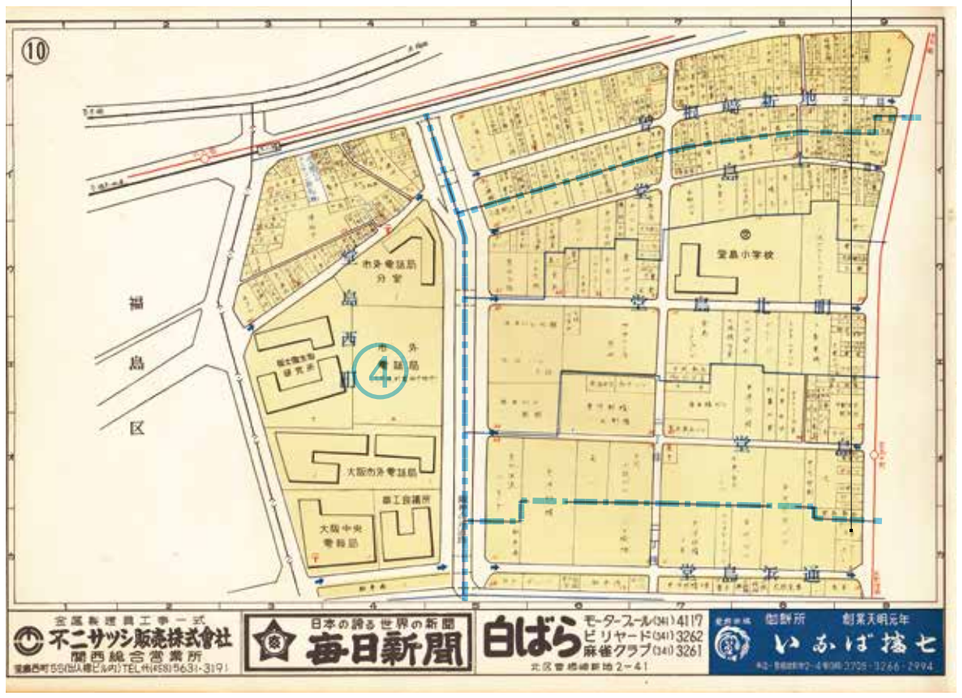
堂島浜通にはクラブ関西、中央電気倶楽部の2つの紳士倶楽部や、サントリー、新ダイビルなどのオフィスビルが建ち並ぶ。また、堂島船大工町には毎日新聞とABC放送があり、大阪のメディアセンターの様相を強める。現在の北新地に当たるエリアでは、大阪万博を背景にクラブ全盛の時代を迎える。堂島西町には現在のNTTテレパークが建設された。昭和40〜41年地図には、好況を背景とした力強い当時の堂島の様子がよくわかる。

しかし、この地図の直後、昭和46年（1971）に大阪商工会議所が移転、大正時代からのシンボルだった毎日新聞も平成4年（1992）に梅田へ移転。地域の人々の心のよりどころでもあった堂島小学校（P14）も昭和61年（1986）に閉校してしまった。

その一方で、2015年に新ダイビルがリニューアルを果たすなどオフィス街として発展すると共に、地区内全体に飲食店も増えてきている。江戸時代から現在まで継承・発展させてきた各エリアの性格は、引き継がれながらも、時代に沿った変化も見られる。

昭和33年（1958）頃の大阪市電堂島中町電停付近。





④ 公的エリアからNTT村へ。

（昭和40年：堂島西町）

戦後、堂島小学校跡地に大阪市立扇町高等学校が移転し、その後堂島西町一帯にNTT西日本関連施設が置かれた。大阪大学微生物研究所が昭和42年（1967）に移転すると、その跡地および大阪商工会議所の跡地を含め、NTTテレパークが建設された（P24）。阪神高速道路が走る場所は、かつて堂島川と大阪駅を結んでいた堀割だった。

③ オフィスビルの集積地に。

（堂島浜通）

戦後すぐ、4300坪におよぶ進駐軍の白い高い塀に囲まれた拘置所が置かれ、その跡地は中国の物産展、アメリカのコニーアイランドショーに利用された後、、昭和26（1941）年、大阪建物株式会社（現ダイビル）が買い取り、昭和33（1958）年に新ダイビルが完成。昭和20（1945）年、渡辺橋北詰の住友海上火災跡地に寿屋が移転。昭和38（1963）年サントリーに社名を変更した。他に戦後にできた主なオフィスビルとして、渡辺橋ビル、古河大阪ビルが挙げられる。渡辺橋ビルには大和銀行、東洋紡経済研究所、関西経営者協会、紀州製紙などがあった。

昭和23年（1948）、戦後日本再興の一翼を担う関西経済人によってクラブ関西が創立。同場所に現存。

② 毎日新聞社を中心に発展。

（堂島船大工、堂島上、堂島中、堂島北町）

毎日新聞社周辺では、毎日会館（毎日放送）、毎日新聞別館、毎日モータープールができ、関連建物が密集していた。毎日新聞は平成4（1992）年に西梅田へ社屋を移転するが、跡地の堂島アバンザには旧社屋の玄関ポーチがモニュメントとして保存設置されている。この堂島アバンザ建設にあたり、堂島薬師堂が元の場所である現在地に移された。明治44年地籍図で藤田組があった一帯は藤田会館（オフィスビル）となり、現在は新藤田ビルとしてその名を残す。

① 戦前のお茶屋から、戦後はクラブへ展開。

（曽根崎新地、永楽町）

昭和30年頃から、社交の形態がお茶屋からクラブへと変容（P18）。この地図では旅館とクラブが混在しており、過渡期であることがわかる。昭和30年代に大阪東映会館、昭和20年代後半に梅田日活ができる。現在、大阪東映会館跡地は御堂筋フロントタワー、梅田日活跡地は駐車場になっている。

堂島の町名と世帯数の移り変わり

〈町名改変の大まかな流れ〉

●明治4年（1871）年の改変
江戸時代からあった堂島新地1～5丁目が堂島浜1～5丁目と改められる。その後、堂島浜や堂島中では、細かく町界が変更されていたようだ。

●明治40年（1907）年の改変（推測）
堂島船大工町と堂島浜1～3丁目の町界が変更。江戸時代の曽根崎村が永楽町、曽根崎上3・4丁目になっている。

●昭和40年（1965）時点
昭和19年（1944）の福島区誕生を機に堂島浜3丁目を堂島西町に改める。昭和40年時点で、堂島裏町1・2丁目は堂島上1・2丁目、永楽町、曽根崎上3・4丁目が合併し、永楽町となっている。

●昭和53年頃の改変
昭和37年（1962）制定の住居表示変更による改変。今まで横に引かれていた堂島の町界が縦に引かれ、東側から堂島1～3丁目となり、永楽町は曽根崎新地1丁目に編入、曽根崎新地3丁目が曽根崎新地2丁目となった。

〈世帯数の変遷について〉

●昭和25年（1950）時点
堂島地区内に1013世帯が居住している。特に曽根崎新地2丁目、3丁目、永楽町、堂島上3丁目の世帯数が多い。

●昭和40年（1965）時点
昭和33年（1958）に新ダイビルが完成。その他のオフィスビルも竣工したため堂島浜、堂島中を中心に世帯数が減少。昭和35年（1960）、曽根崎新地1丁目、2丁目で微増したが昭和40年時点では減少。昭和25年と比べ堂島上2丁目で人口が増加したが、他は減少しており、地区全体としては減少している。昭和40年代には昼夜間人口比率が大阪市内で最大となった。

●昭和60年（1985）時点
昭和53年（1978）、都市計画決定により堂島側沿いの遊歩道建設がスタート。これにより堂島浜通の世帯数はほぼ0となる。昭和40年時点で小規模店舗が並んでいた曽根崎新地1～3丁目、永楽町、堂島上町では、複数店舗の区画をまとめてビルが建設されるケースが目立ち、世帯数が減少。また、堂島中町にもオフィスビルが建ち並ぶようになり、昭和40年からの20年間で世帯数は2分の1以下になった。

●現在
堂島小学校跡地にできたタワーマンションほか、堂島2丁目を中心にマンション開発が進む。このため、2000年を底に世帯数が増加。昭和40年代頃の世帯数まで回復しつつある。また、飲食店増加の影響により、昭和60年以降減少し続けていた曽根崎新地1～2丁目は、平成7年（1995）を底にV字回復を見せている。大阪北区の他地区と比較しても昼夜間人口比率が大きく（平成12年統計）、住居よりも職場が中心の地区である傾向は変わっていない。

■堂島の地名変遷

堂　島	明治44年時点（明治40年改変）	昭和19年改変（福島区誕生）	昭和40-41年時点		昭和53年頃の改変
堂島川と蜆川に挟まれた元々の砂州 堂島浜通1～4丁目 堂島中通1～2丁目 堂島北町	堂島裏1丁目		堂島上1丁目		堂島1丁目
	堂島裏2丁目		堂島上2丁目		
	堂島船大工町				
	堂島裏3丁目				
元禄元年造成	堂島浜1丁目				堂島浜1丁目
	堂島浜2丁目				堂島浜2丁目
	堂島浜3丁目	堂島西町			堂島3丁目
	堂島中1丁目				
	堂島中2丁目				堂島2丁目
	堂島北町				

曽根崎	昭和44年時点		昭和40-41年時点		昭和37年住所表示変更による改変
貞享元年から2カ年で造成	曽根崎新地1丁目		曽根崎新地1丁目		曽根崎新地1丁目
	曽根崎新地2丁目		曽根崎新地2丁目		
	曽根崎新地3丁目		曽根崎新地3丁目		曽根崎新地2丁目
	永楽町		永楽町		
	曽根崎上3丁目				
	曽根崎上4丁目				

■堂島の世帯数の変遷

昭和25年時点	昭和53年頃の改変	昭和25年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	平成12年昼夜間人口比率
堂島中（通）1丁目	堂島1丁目	85	73	49	42	62	41	27	17	41	15	31	30,602.9
堂島船大工町		61	60	58	42								
堂島上1丁目		41	46	38	43								
堂島浜1丁目	堂島浜1丁目	56	46	34	24	2	2	2	8	6			126,142.9
堂島上2丁目	堂島2丁目	71	59	84	72	36	28	45	48	32	72	236	14,497.3
堂島中2丁目		37	32	32	22								
堂島北町		44	41	29	19								
堂島浜2丁目	堂島浜2丁目	14	14	10	10	8	1	1	2	—			213,433.3
堂島西町	堂島3丁目	74	70	58	51	37	31	33	29	32	16	29	1,715.9
堂島上3丁目		117	52	51	42								
曽根崎新地1丁目	曽根崎新地1丁目	80	44	49	39	80	65	42	—	—	152	170	12,147.8
曽根崎新地2丁目		128	120	143	112								
永楽町		108	110	70	70								
曽根崎新地3丁目	曽根崎新地2丁目	117	109	96	88	46	37	27	—	—	20	31	6,168.9
合　計		1,013	876	799	676	271	205	177	104	111	275	497	

単位：世帯

は、減少、　は増加を示す

堂島を引っ張る、町会の活動。

IV 堂島の「今」と「これから」

オフィス街のイメージからは想像できないかもしれないが、堂島は連合振興町会、いわゆる町会の活動が盛んだ。カレンダーにすればご覧の通り、ほぼ毎月何かしらの活動が行われている。

行事は主に堂島地域集会所（堂島会館）を中心に開催。参加者は町会加入者が中心だが、企業が連携した節分のお水汲み祭りや堂島盆踊り大会などは会員でなくても誰でも参加できる。また、「お隣」の中之島町会との交流も深く、住民同士がお互いの行事に参加し合っている。

こうした行事以外にも、地域事業所協力のもと小規模なコミュニティスピーカーを設置し、行事の案内や災害時の情報提供を行っている。加えて、街頭防犯カメラの設置や自転車などの放置禁止地域の指定を受けるなど、安全安心のための努力も町会の大切な取り組みの一つだ。また、中之島ガーデンブリッジの花壇に花を植えるといった、美化活動にも尽力している。

平成9年（1997）にJR東西線が開通し、北新地駅が開業した。計画時、駅の仮称は「桜橋駅」だったが、地域の名前を駅名にしたいという町会や料飲協会の人々の要望によって変更されたという。地元を愛する町会の面々の思いが、堂島を引っ張っている。

【堂島地域関係団体の行事】

1月
- ◎堂島地域各種団体新年互礼会［ANAクラウンプラザホテル］
- ◎えびす祭（天神さん）［北新地］

2月
- ◎ふれ愛喫茶（百円喫茶）・出前寄席［堂島会館］
- ◎堂島節分祭・お水汲み祭り［堂島薬師堂］

3月
- ◎堂島ふれ愛花見会［堂島ふれあい広場・堂島会館］

6月
- ◎堂島地域活動協議会等委員総会［堂島・中之島老人憩の家］

7月
- ◎堂島連合15町会・日本赤十字運動社資募金
- ◎天神祭北新地巡幸宵宵宮
- 鳳講・天神講
- ◎天神祭

8月
- ◎堂島盆踊り大会［堂島ふれあい広場］
- ◎天満防犯の夕べ（天満警察署員の講習）地蔵盆［浄祐寺］

9月
- ◎敬老の日の集い・金婚のお祝い［堂島会館］

10月
- ◎赤い羽根募金 北区民カーニバル［扇町公園・北区民ホール］
- ◎災害時避難訓練［堂島ふれあい広場・堂島会館］

12月
- ◎堂島餅搗き大会［堂島ふれあい広場・堂島会館］
- 北区愛の募金
- ◎歳末夜警（天満防犯協会堂島支部）［拠点／堂島会館］

その他、通年行事として花植え、道路の清掃、橋洗い
再生資源古紙集団回収事業（隔年毎）、
日帰りファミリーバスツアー（2年に1回）、安心安全まちづくり（毎月）

7月／天神祭北新地巡幸宵宵宮

3月／堂島ふれ愛花見会
旧堂島小学校のグラウンドである堂島ふれあい広場には桜の木があり、春になるときれいに花を咲かせる。テントを張り、花を見ながら、食事や落語、講演などを楽しむ。

2月／ふれ愛喫茶（100円喫茶）・出前寄席
秋から3月にかけて年に5回ほど実施。みんなで集まり、お茶を飲みながらおしゃべり。踊りや歌、落語を上演したりすることも。また、内科医や歯科医を招いた健康に関する講演会も毎年開催している。

10月／災害時避難訓練

堂島ふれあい広場で中之島地域と合同で毎年開催。北区役所、北消防署、女性会、水防団、地域防災リーダー、NTT西日本、天満警察、桜橋渡辺病院などの協力のもと、避難所開設訓練や災害ダイヤル操作、土のうづくり、煙中体験、人命救助などさまざまな訓練が行われている。堂島地区では、2008年にANAクラウンプラザホテル大阪と提携し、ホテルの一部を一時緊急避難所として提供する覚書を交わすなど、企業や事業所も一体になった地域防災に取り組んでいる。

8月／堂島盆踊り大会

オフィス街のど真ん中、旧堂島小学校グラウンドで毎年行われていた盆踊り大会が、2013年、5年ぶりに復活。住民だけでなく、周辺企業で働く人や、専門学校生など、誰もが楽しめる夏の恒例行事。地元と企業の寄附で、氷や焼きそばなどの出店も。

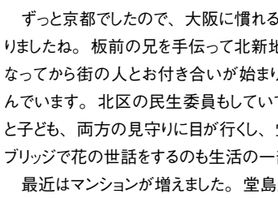
12月／堂島餅搗き大会

◎堂島連合振興町会への加入について

堂島連合振興町会の加入数は2014年1月時点で343世帯（そのうち事業所数286）。現在、堂島は住民が少なく、法人会員が多いのが特徴になっている。町会への加入は、住んでいる人だけでなく、堂島に住所のある企業・事業所、また新しく会社を興す人でも可能。会費は法人・個人共に月額1,000円～。加入希望者はまずは住んでいる場所の町会長に連絡を。堂島地域の詳細図に各町会会長の連絡先が書かれている。

地域のつながりの中心、堂島会館（堂島ふれあい広場）。

堂島小学校跡地に建設された施設（堂島地域集会所／通称・堂島会館）とグラウンド（堂島ふれあい広場）。「地域住民が気軽に寄り合って互いに親睦を図り、そのコミュニティ活動の場となる『地域集会所』や遠くに出掛けることが困難な高齢者が、住み慣れた地域で親しく話し合え、その健康の維持・増進、文化教養の向上」のため、堂島内外の地域活動拠点として大切に利用されている。3時間3,000円～で、どなたでも利用可能。問い合わせ ☎06-6345-2688



わたしの堂島物語 ⑤

外の若い人も含めた「ご近所付き合い」を。

増尾記代香さん
堂島連合女性部長
堂島地区民生委員児童委員

ずっと京都でしたので、大阪に慣れるのは5年かかりましたね。板前の兄を手伝って北新地で働くようになってから街の人とお付き合いが始まり、堂島に住んでいます。北区の民生委員もしていて、お年寄りと子ども、両方の見守りに目が行くし、堂島ガーデンブリッジで花の世話をするのも生活の一部ですね。

最近はマンションが増えました。堂島生まれの子どもがここで育って、ご近所のいろんな世代と交流できたらおもしろいでしょうね。できれば地元の小学校に通ってほしい。その方が非行なども防げます。三浦雄一郎さんが校長を務めるクラーク国際高等学校も堂島にできたので、生徒さんが盆踊りや地蔵盆に来てくれるのが今は楽しみです。北区の他地域でも「地蔵盆」って少ないんですよ。ひそかな自慢です。

ただ、堂島でも北新地でも昔に比べると情のある付き合いが弱くなっているように感じます。お店も簡単に出せてダメならすぐ閉める、そんな風潮がちょっと心配ですね。

これからも、堂島で。

—住む・働く人が期待すること—

「旧館を設計した村野藤吾は、誰にも受け入れられ、かつ愛される動物であるとの理由で羊の像を設置したと聞いています」。左から林さん、片桐さん、鈴木さん。羊は旧ビルの取り壊しにあたり、地域から保存の要望を受けて地上に引っ越した。新ダイビルは火災や地震、洪水などの災害やテロ、犯罪、システムの不具合から会社や事業を守り継続させるためのBCP（Business Continuity Planning）も準備している。

下右／旧館竣工当時のダイビル社長・工藤友恵（人物左）と日本野鳥の会初代会長の中西悟堂。下／中西悟堂の進言により、屋上樹苑には鳥の水浴び場が設けられた。『ダイビル75年史』より

「堂島の杜やかわいい羊と共に、歴史ある川べりの街づくりでお役に立てればと思います」

片桐俊之さん
林 幸司さん
鈴木祐大さん
ダイビル株式会社 広報室

２０１５年春に再オープンした新ダイビルでは、旧館の名所だった「屋上樹苑」を地上に再現させることに腐心しました。クス、モミジ、ケヤキなど元々あった樹木の一部を移植し、鮮やかな緑がビルを取り巻く「堂島の杜」で復活しました。旧館４階の外壁から張り出していたシンボルの羊は補修と防水を施し、庭園の入口に設置しました。

ビルのそばに堂島や北新地がありますので、テナントで働いておられる方が昼も夜も利用してくだされば共存共栄になります。実際にビルができてから北新地の利用客が増えたと聞き、喜んでいます。

新ダイビルの大きな特長は１フロアの面積が広いことに加え、柱が窓の外にあるので死角がないことです。４階には貸会議室があり、１５６席がゆったり取れる会議室１は今回の堂島地域誌お披露目会の会場にもなりました。

ここ数年の間に堂島を取り巻く環境は大きく変わりましたが、印象的なのは「水都大阪」の復活ですね。川沿いのテラスは盛況だし、船着き場も新設されています。ビル南側の堂島川右岸は、中之島の日銀やフェスティバルタワーなどの景観が美しい場所なので、河川敷がもっと憩いの場所になるように整備されればいいですね。日本全国の米取引を扱っていた「堂島米会所」跡が目の前なのですから。

ビルの竣工に合わせ、川沿いに「堂島公園」の施設を改修し、大阪市に寄付しました。街をよりよいものにする活動を今後も続けていきます。

「職住一致にはおすすめの街です。散歩も楽しいし夕日もきれい。早く農業もやってみたいですね」

仕事は地域振興関係です。以前は出張から天満橋の事務所に戻れば夜中で、伊丹の自宅に帰らず泊まったこともありました。あと10年は仕事を頑張りたい、家庭も大事だし…と欲張って夫を説得し、堂島に引っ越しました。

大阪に住むことの抵抗感は、エレベーターで初対面のお父さんお母さんからの「前置きなしの質問」で洗礼を受け、すぐ慣れました（笑）。飼い猫も仕事場に入るし、今では猫に癒される社員も多いです。「堂島」「事務所可」「猫」の一つが欠けても大阪暮らしは実現しなかったでしょう。

堂島は梅田と違い、懐石料理のように小さなビルや老舗が残っていますね。ドーチカは商店街っぽいし、休日に北新地をぶらぶらするのも楽しい。好きな風景は夕暮れの渡辺橋で、堂島川の向こうに見える夕日は素晴らしいです。

最近は地元の盆踊りにも参加しています。町会活動が盛んなので、今後はもう少し地元と関わる機会を増やしたいですね。あと、無理を承知のうえで、ですがここで農業がしたい。米相場の地で「堂島産のお米」っていいでしょ。

「最近は何かいいことがあると、堂島薬師堂さんに感謝のお参りをしています」。

竹川智子さん
株式会社フラン代表取締役

製薬会社や新聞社、展示場勤務を経て独立。2013年秋に堂島に転居、事務所兼用に。

松井一（はじめ）さん

堂島で90年以上続く蕎麦屋［深川］店主。堂島小学校が統合された後の北小学校のPTA会長も務める。

「昔は会社によく出前していました。今は一見の個人客が多い時代ですね」

4年生までは曽根崎小学校、5年生からは復活した堂島小（P14）に通いました。制服があって、おしゃれでおぼっちゃまの感じでしたね。校歌も自慢だし、高槻や神戸など校区外からも来ていました。OBになってからは子ども会の会長として海水浴にも行きました。

四つ橋筋沿いの路面店をビルにして、今は地下です。以前に比べて口コミの女性客や一見さんも増えています。家業で地道にやっている店が少ないからかもしれません。

「個人商店は顔と信用が大事。堂島でやってこられたのはそこです」

以前は市電の「堂島電停前」、中日新聞の北隣に仕事場兼住まいがあり、結婚後もそこに親父たちと住んでいました。私どもはずっと個人商店ですが、あの頃の社長は「顔」の信頼を大事にする人たちだったので、発注をたくさんいただき、大手の代理店からよくイヤミを言われました（笑）。子どもは３人とも堂島小学校を出ています。孫も含めてご近所で食事会をするのが最近の楽しみですね。いい店が多い堂島ならでは、のことです。

谷澤庸禎（のぶさだ）さん
・左恵子さん

酒造会社を中心に、看板や立体広告物で90年近く続く［花園］の店主。昭和35年（1960）に結婚。

竹田潤一さん
・さおりさん
彩夏さん**・悠馬**くん

結婚後、以前住んでいた堂島の住居にリターン。子どもは北区内の公立小学校に通う。

「昔より今の方が、町内の行事が盛んな気がします」

昭和50年代に北新地で両親が食堂をしていて、当時手に入れた堂島の家に住んでいます。堂島小に通い、16歳までここで過ごしました。近くに小学校がないのは仕方ないですが、昔は［出入橋きんつば屋］の前に児童公園があったように、子どもの遊び場がもっと増えればいいですね。地域のコミュニティセンターでいろんなイベントをしているし、それに参加すると地元の方の顔も見える。子どもたちにとってご近所は大事です。